

---

# アクレニア戦記

フリューナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクレニア戦記

### 【Nコード】

N2270V

### 【作者名】

フリーナ

### 【あらすじ】

複数の男女が織り成す、ファンタジー物  
世界に生まれた二つの大国  
その二国を覆う影に、少年少女たちは戦う  
後改定します（多分）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## プロローグ

天空に輝く、二つの月。

北の空に輝く、淡い朱色の光を放つ月『エスカレルニア』。

南の空に輝く、濃い蒼色の光を放つ月『フォーゲルノート』。

手を伸ばしても届かない、そんな高みにある美しい二つの月に、人々は憧れた。

二つの月に対する信仰は、二国と呼ばれる大国を産み出した。

北の大陸に居を構える『エスカレルニア王国』。

南の大陸に居を構える『フォーゲルノート帝国』。

二国は独自の発展を遂げながらも、お互いを尊重し敬った。時折現れる、魔物からの恐怖を協力して打ち払い、手を取り合いながら生きていた。

二国が建国されて百年。

月への信仰心は薄れてしまったが、人々は穏やかに平和の時を過ごしていた。

だが、そんな平和にも影はあった。

数年前、エスカレルニア王国の辺境の農村が魔物に襲われたのだ。

その事件については、あまり珍しい事ではなかった。魔物が村や町を襲う事など、二国が建国される前から頻繁にあったからだ。

そのため、その事件はすぐに風化し、人々の記憶から消えていった。

その他にも、そのような事件は多数報告されたが、王国騎士団や帝国騎士団により終結した。

その影で、暗く、深い闇の思惑が蠢く事も知らずに。

## ブローグ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 求める者たち

ガヤガヤガヤ…

ここはエスカレルニア王国の首都クルメニア。

町の中心に城が建ち、町は城下町として賑わっている。そんな首都。

「ちよつと、カナ！ 待ってってば！」

「待たない！ 早いところお宝を鑑定してもらいにいくんだから！」

そんな町中に、一人の少年の悲鳴にも似た声と、一人の少女の急かす声が響いた。

少女を追いかける少年は、水色の髪を横に流し、少し自信の無さそうな目をしている。さながら美少年といった風貌で、腰についた手甲のような双爪を揺らして走っている。

少年を振り返る少女は、漆黒の髪を二つに纏め、快活そうな瞳を持ち、背には大きな槍を背負っていた。

「カナ！ そんなに早く行く必要ないって！ …また売れないかもしれないんだし」

「シオン！ 不吉な事言わないの！ それに、私の勘では絶対に値がつく！ シオンが見てもそう思うでしょ？」

「うーん…。…どうだろう。確かにあのユミルの遺跡から取ってき

た古文書だけど、この劣化は…」

シオンと呼ばれた少年は、顎に手を当てて真剣に悩み出す。

そんなシオンをカナと呼ばれた少女はただ、見つめる。信頼に満ち溢れた眼差しで。

「うん。僕としてはこの古文書は、売れても五百メルぐらいになればいいと思う」

「えー！ あれだけ苦労したのに!？」

シオンの言葉に、落胆の表情を隠せないカナ。そのまま膝を降り、地面の石畳に手をついてしまう。

だが、そんなカナにシオンはでもと言いながら肩に手を置く。

「考古学調査をやってる所とかだったらいけるかもしれないよ？  
まあ、あくまでも謝礼程度だから、あんまりもらえないと思うけど…」

「謝礼程度か…。ま、落とし所ではあるわね。今までシオンの目利きは外れた事無いし」

手と服についた埃を払い、仕事の相棒への称賛を送る。

その称賛に、シオンは照れた笑みを浮かべ、頬を掻いていた。

「…それを言うならカナもだよ。なんにも考えてないようなのに、急にお宝を持って帰ってくるんだから」

「…それって貶してるのか褒めてるのか分からないわよ」

「褒めてる褒めてる」

「そう。それならいいけど」

「ま、取りあえず鑑定所に行こうよ。こんな所で悩んでも分からないものは分からないんだから」

「そうね。それなら行きましょ?」

二人は笑いあつて、目的の場所へと歩き出した。

「ん? ねえカナ、なんかあつちが騒がしいんだけど…」

「え? 本当だ。大方大道芸人でもいるんだろうけど、あの人ばかりはちよつと多いわね」

目的地に向かって歩いてみると、道の端に結構な数の人ばかりが出来ているのをシオンが見つける。



いくら首都と言っても、これだけの人が集まるのは珍しい。カナの言う通り、大道芸人やその他の人の注目を集める事をしているのだから、魔法の在るこの世界ではあまりその職業に対する客受けは良くない。

なぜなら、一言で言えば見慣れてしまっているからだ。魔法と言う万物の法則の象徴があるのに、手品と言うものでは少々物足りないと感じてしまう。

「ちょっと行ってみない？　なんか興味があった」

「いいわよ？　でも、そんなに面白いものが見れるとは思わないけど…」

シオンの提案に、カナは疑問を持ちながらだが同意し、シオンについていく。

人だかりに向かって歩いていると、その中心から冷たい言葉が聞こえてきた。

「…いい加減にして。見世物じゃないの」

言葉に乗った鋭利な刃が集団に突き刺さる。

その言葉によってこじ開けられた集団の中から、一人の少女が現れる。

髪の色は薄い金色。髪をカナと同じように二つに纏めているが、その長さは少女のほうが長い。軽蔑するような視線を集団に向け、堂々とした態度で歩いている。

「…ねえ、あれって…」

「うん。召喚魔だね。…じゃあ、あの子は魔導召喚師かな？ あ、指輪もついてるね」

カナの投げかけた質問に、シオンが冷静に答える。

シオンが言った召喚魔とは、少女の肩の上辺りに浮かぶ服を着た丸い鳥の事だ。

この鳥の名前は、スーバード。魔物の中でも比較的弱く、滅多に人を襲う事はない。そのため、その愛くるしい形は癒しの対象としてペットにされている。

だが、魔物を使役、捕まえる事が出来るのは魔導召喚師だけなので、その道に進む者にとっては格好の路銀稼ぎの対象となってしまうているのが現状だ。

「…全く。いつもの事だけど、鬱陶しいったらありやしないわね」  
輪の中から完全に抜け出した少女は、ため息を吐きながら悪態をつく。

そして、右手の中指にはめた指輪を光らせ、スーバードを下がらせる。

「はあ…。すごいなあの人。無詠唱で召喚魔を戻したよ」

「そうね…。確か、どこかであの子を見聞きした事があるはずなん

「ただ…」

単純に少女の技に感嘆するシオンに対し、頭に引っ掛かった名前をひねり出そうと、思案していた。

そんな二人をよそに、少女はすたすたと歩いていく。とは言っても、少女の目には二人の姿など一度たりとも入っていないのだが。

「あ、と言うか鑑定！ 危うく忘れる所だったじゃない！」

「へ？ 僕が悪いの？」

「シオンが見に行こうなんて言うからでしょ！？ ほら、早く行くよ！」

「痛っ！ 痛いから！ 耳を引っ張るのは止めてー！」

その場所にいた人間は、先程の少女の事など、すぐに忘れただろう。

耳をエルフより長く引っ張られたまま引きずられる少年の異常さに。

求める者たち（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 拒絶する者

「……………」

カツカツカツ…

薄暗い路地に、先程の少女の足音が響く。

その威風堂々とした佇まいは、思わず道を開けてしまいそうな雰囲気  
気を纏っていた。

「…ここね」

路地を数回曲がった先で、少女が足を止める。

そこには寂れた扉が音を鳴らしながら揺れ、いかにも廃墟と言う雰  
囲気を醸し出した酒場だった。

周囲に人の気配もなく、スラムよりひどい臭いのする場所に少女が  
立ち寄った理由はただ一つ。仕事である。

ギギイ…

今すぐにでも壊れそうな扉を押し、中へと入り込む少女。すると、  
先程までは感じられなかった気配が、敵意が少女を襲った。

「…ふーん。たまにはあいつも役に立つのね。情報通りじゃない」

不適な笑みを浮かべ、敵意の感じる方向に背におった杖を構える。

「グルルル…」

杖を構えた方向から、一匹のクローウルフが唸り声を出しながら現れた。

その体躯は人より少し小さいが、足の爪が鋭利に発達しているため、歩く度に力チ力チと音を鳴らしながら歩いている。

「首都にウルフが入り込んで巣を作っている、か。最初はなんてでたらめと思ったけど…」

警戒しきった様子のクローウルフを睨みながら、少女は構えた杖を閃かせる。

次の瞬間、杖についた宝玉が光り、無詠唱で魔法が発動する。

「ガウツ!？」

困惑の声を上げ、周囲を見渡すウルフ。

それもそうだろう。宝玉が瞬いた瞬間、この寂れた酒場が一瞬で氷に包まれたのだから。

「フフ…。さて、あなたはどんな声で鳴いてくれるのかしら？」

恍惚の表情を浮かべ、氷の世界に立つ少女は、さながら氷の女王だった。誰もが畏怖し、頭を垂れる。そんな空気が、場を支配していた。

「ガアッ！」

ウルフは畏怖の対象を目にし、氷の冷たさではなく野生の本能から震えていた。だが、震えを押さえ込み自慢の足の爪で氷の床をしつかりと掴んで、少女へと飛びかかる。

それを見た少女は、喜色の笑みを浮かべながら呪文の詠唱を始める。

「凍てつく世界よ。我に齒向かう愚かな煩愚に、氷の誓約を！」  
アイシクルプリズン  
『氷の監獄』！」

ズズン…！

「キャン！」

ウルフの爪が少女に届こうと言う時、ウルフの頭上から氷の塊が降ってきた。その塊はウルフを閉じ込め、外へと出られないように閉じ込める。

「…ここはあたしが作った、あたしだけの氷の空間。あなたはもう負けてるのよ。…私に出会った時から」

閉じ込めたウルフの元へと歩みより、杖でウルフをつつく少女。

「ま、ハンティング使役してあげても良いんだけど、あいにく間に合ってるのよね」

右手の指輪を閃かせ、その存在を誇示するように見せつける。

そして、それからは杖でつついたり檻を縮めたりしてウルフの反応

を楽しんでいた少女だったが、あまり反応が変わらないようになってきたのが気に入らなかったのか、突然無表情になる。

「…もう、いつか。ま、恨むなら運命を恨みなさい。私に出会ったのが運のつきだって」

捨て台詞のように呟くと、ゆっくりと左手を掲げる少女。

「最後までいは楽に逝かせてあげる。ここの片付けも含めて、ね」

掲げた左手を、ゆっくりと握り込みながら呪文を唱える。指を一本づつ、ゆっくりと折り込みながら。

「深淵の闇に光る、一塊の氷塊よ。その身に閉じ込めた者の魂と共に弾けよ！ 『氷の壊』<sup>アイスブレイク</sup>！」

手を完全に握り混んだ瞬間、少女によって作られた空間が崩れ去る。凍りついた壁と天井は剥がれ落ち、床には大きな亀裂が起こり、氷の世界が破壊される。

そして、氷の檻に閉じ込められていたウルフは、檻が一気に収縮した事により、氷に閉じ込められ、氷と共に弾けた。

絶対零度で弾け去った肉は、血を流す事も許されずに流れていく。

その様子を、少女は冷めた目で眺めていた。

「…戻りましょうか。こんな辛気臭い所、仕事じゃなかったら絶対に来ないわよ」



最後にそう言い残すと、少女は踵を返して去っていった。

「ちよつとあんた、珍しく正しい情報寄越したと思ったら、なに？  
あれは？」

「な、なんの事かな？」

ウルフ狩りを終えた少女が向かったのは、情報屋を生業としている  
男の店だった。

そして今、テーブルを挟んで少女が腕を組んですごんでいる。そんな少女の態度を見て、男は視線をさ迷わせている。

「あんなクソ汚い所だなんて聞いてないんだけど？ それに討伐対象がクローウルフ一体って…。あたしを試してるの？」

「い、いや、そんなつもりはないよ？ い、いやだなー、ユフェルニカさん」

ピシッ

男が少女の名前であろう名を呼んだ瞬間、世界が文字通り凍りつく。

「…あたしの名前を、あたしの許可なく口に出すなって、前にも言わなかった…？」

小さい店に吹きすさぶ氷嵐に、男はただ怯える事しかできない。

「…仕事上、名前は教えてあげたけれど、あたしはあたしの気に入った奴にしか名前を呼ばせない。…特にあんたみたいなのは絶対に呼ばれたくないの」

「…す、すみません…」

氷点下をさらに下回る冷酷な眼差しに、男はただ萎縮し謝る事しかできない。

そんな男に、小さいが綺麗な指を向け、その指の先に紫電を纏わせる。バチバチと音を鳴らしながら近づく指先に、男の恐怖は最高点を越えた。

「…なに？ 漏らしたの？ だらしないわね」

男が恐怖のあまり失禁した事に、ユフェルニカは呆れてしまう。

「これからもうっと面白い事して上げようと思ったのに」

唇をつり上げながら笑うユフェルニカに、男はただひきつった顔をするしかなかった。

ユフェルニカに見える、悪魔の羽と尻尾を幻影だと思い込むために。

## 拒絶する者（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 兄妹のあり方

「はあっ！」

ブンッ

広い部屋に、少女の凜とした声が響く。

何も調度品の無い、あると言えば窓だけと言つ真つ白な部屋で、少女は一心不乱に剣を振っていた。

剣を振るう度に揺れる、白銀の髪。真剣さがうかがえる青い瞳。そのどれもが美しく、輝きを放っていた。

そんな少女に、一人の青年が声をかけた。

「やあ、リイナ。今日も頑張っているようで何よりだね」

「レイソル兄様！」

リイナと呼ばれた少女は、兄と呼んだ青年に飛び付く。汗だくだと言うのにレイソルは全く気にせず、飛び付いてきた自分の妹を抱き締める。

「おいおい。いつも言ってるだろ？ 急に抱きついてきたら危ないっつて」

「ごめんなさい、兄様。でも、兄様を見たら、つい」

「まあ、いいんだけどね。…それはそうとリイナ。久しぶりに、どうだい？」

レイソルは転がっていた長剣を手にとると、リイナと同じ白銀の髪を揺らしながら構える。その青い瞳は、挑戦的なものを浮かべていた。

「兄様：！ はい！ 喜んでお受けさせていただきます！」

兄の提案に、花の咲いたような笑みを浮かべると、リイナは剣を構える。

リイナは剣を中段にしっかりと構える、ハーキュリー流の基本的な構え方をとり、レイソルは長剣を右手だけで持つて体を開く、片手用の防御の構えをとった。

二人ともハーキュリー家の嫡子であるため、お互いの構えの弱点、つまりハーキュリー流を熟知している。

リイナの構えは、基本であるがゆえに読まれやすく、決め手に欠ける。レイソルの構えは、防御し受け流すための構え方で、基本的に攻撃はできない。

だが、そんな事を気にするような二人ではない。ハーキュリー流の真髄は、構えを、『型』を頻繁に入れ換える事だからだ。

その証拠に

「やつ！」

「ふっ！」

二人の型は全く違うものになっていた。

レイナの型は、剣を横に寝かせて脇に構えた早さを重視する型になり、レイソルの構えは剣を右手に持ったままだが、体の開きが逆になって剣を後ろ側に引いて構えていた。

ガギンッ！

「キャッ！」

数合打ち合った後、耳障りな剣の擦れる音と、レイナの小さい悲鳴が重なる。剣を弾き飛ばされ、尻餅をついたレイナの首筋に、レイソルの剣が突きつけられた。

「これで勝ち、だね。レイナ？」

「…負けました…。やっぱり兄様は強いです」

「ははは。レイナも十分強いさ。奥の手を出されてたら、やられていたかもしれないよ」

レイソルは笑いながら、落ち込む妹の頭を撫でる。

その手の感触に、最初は陶醉していたレイナだったが、すぐさま我に返って兄の手を振りほどく。

「いやです！ 剣と剣の、一対一の勝負に魔法は無粋です！」

「…そう言ってもらえると助かるよ。俺には魔法は使えないからさ」

「あ、そう言う意味で言った訳では…」

少しでも遠い目をしながら言葉を発した兄に、リイナは慌てながら弁解する。

だが、兄はそんな事を気にせず、笑みを浮かべ、リイナの頭をクシヤクシヤと撫でる。

「俺もそんな意味で言った訳じゃないよ。リイナが気にする事じゃないさ」

「兄様…」

「さ。そんな事は忘れて、鍛練しようか！　まだまだ強くないといけないからな！」

「ええ！？　兄様、まだ強くなるんですか！？」

楽しそうに笑って剣を握り直す兄に、妹は呆れながら突っ込んだ。



## 兄妹のあり方（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 新しい仲間

「寄って、見てって、買ってってー。破格の値段で新登場だよー」

首都クルメニアにある露店街。熾烈な顧客取りの行われるこの一角で、集客の音が響く。

その声の主は、ピクピクと動く猫耳が愛らしい、獣人族の少女である。

石畳の上に、乾燥した草で編まれた絨毯を敷き、その上に商品が並べられてある。その商品は、全体的にサイズが小さく、人の手で十分握り込む事のできる色とりどりの球体だった。

「飴ー、飴はいかがですかー。体力、魔力、気力回復に便利な飴も置いてますよー。是非見てってくださいー」

その球体の正体は、なんと飴だった。それによく見ると、小さいが看板が立っており、その看板には「飴、売ってます。冒険者、トレジャーハンターの方はぜひ！」と言う文字が書きなぐられていた。

だが、少女が呼べども呼べども人は見向きもしてくれない。理由は単純、安価で扱いやすいのは確かなのだが、回復量が多くないのだ。いくら安くても、吸収率の悪い薬より、吸収率のいい薬を選ぶだろう。その証拠に、飲み干す事で効果を発揮するポーションの方が圧倒的に人気がある。

さすがに、死すらも超越すると言われるエリクサーには及ばない速

効性だが、それでも飴よりは効くのだ。

「うーん…。ぜんっぜん売れないニャー。やっぱり、飴は止めてもふもふした装身具の方が…」

少女が、真剣に店の方向転換を考えていると、二人の男女の声が聞こえてきた。

「あ。カナ、あそこに売ってるよ?」

「ほんと、シオン? どこどこ?」

「あそこ。獣人族の子が店番してる」

「あ、ほんとだ。じゃ、あそこにしよう」

「ニャ? お客様ですか?」

「うん。ここでは、飴を売ってるんだよね?」

店の方向転換を考えていた少女だったが、思わぬ来客に心を踊らせる。シオンが少女に店の内容について訪ねると、上機嫌で答えた。

「そうですよ。体力、魔力、気力回復に便利な飴も置いてますニャ」

「へー。…連れのカナが飴好きでさ。回復系だったらポーシオンで十分なんだけど、カナはあの染み渡る感じがいいって聞かなくて」

「いいじゃないの別に。回復だったらシオンでも十分なんだし」

「十分って…。ま、いいけどさ。それで店主さん。値段の方はどうなの？」

「えっと、基本的に一個十メル以下で売って…」

「え！？ 十メル以下！？」

少女が値段の説明を始めた時、十メル以下という破格の安さに、カナが身を乗り出す。

「ニヤニヤ！？」

「こら、カナ。店主さん驚いてるだろ？」

「でも！ 十メル以下だよ！？ 普通のお店の半分以下だよ！？」

「だから動くなつて。槍が、槍が当たるから」

軽く暴れるカナをシオンが制する。軽く肩を掴んで制するだけなので、槍が動くのを止められてはいなかった。

「ごめんね、店主さん。もう少しで治まるから…」

「…人を猛獣みたいに言うな！」

シオンが申し訳なさそうに謝ると、カナの一撃がシオンの頬に突き刺さる。そんな様子を店主である少女は笑って眺めていた。

「ほんとごめんね？ 店主さん」

カナに殴られた頬を押さえながら、シオンは頭を下げる。

「うわっ、別にいいですニヤ。それに、クーの事はクーでいいですよ？」

「いいの？ じゃあ、クーさんで」

「あ、さんもつけなくてもいいです。クー達獣人族はさんとかつけないですから」

「あー、それもそうね。基本的に名前しかないから、呼び捨てか他の呼称だったわね」

「へー、そうなんだ。じゃあ僕らも名乗らないとね。僕はシオン・シオン・セナ。よろしく、クー」

「私はカナ・コルセルニアよ。でさ、ほんとに十メル以下なの？ だったら鼻屑にさせて貰いたいんだけど…。と言うか、一緒に来ない？ 専属の飴職人とかで」

自己紹介の最中、カナがそんな爆弾発言を投下する。

「ちょっとカナ。それはあんまりだと思うよ…」

「えー、だってわざわざ首都まで帰ってこなきゃならないのよ？  
だったら一緒に旅した方が都合がいいじゃない」

「それはそうだろうけど、相手の都合とか色々…」

「いいですよ？」

「はい？」

「ほんと！？ やったー！」

カナの発言をシオンが否定しようとする、その当事者であるクーがあっさりと認めてしまった。

重要な事をあっさりと決めてしまったクーに、シオンは耳を疑う。  
話を持ちかけたカナはあまり気にせず、喜びのあまりクーに抱きついていた。

「うにゃあ！」

「やったね！ じゃあ、クーちゃん。これからよろしくね？」

「よ、よろしく、ですニヤ」

抱きついて頬擦りまでしてくるカナに、クーは戸惑いながらも合流の挨拶をのべた。

「でも、ほんとによかったの？」

未だに抱きついて頬擦りを止めなかったカナを、シオンが殴って沈めた所で、クーへと問いかけるシオン。

「んー、そろそろお店畳んじやおうか悩んでたから、いいきっかけになったよ。…それに…」

チラチラ…

「ん？ どうしたの？ クー」

シオンが話しかけた辺りから      実際はもっと前からなのだが  
視線がチラチラとあるものに動くクー。

その視線の先が気になり、シオンもそのあるものに目を移すと、カナの槍が目に入った。

「…ニヤア」

蕩けるような声を出し、顔をだらしなく歪ませるクー。

そんなクーにシオンは苦笑しながらも、カナの槍『レストーション』の石尻の部分に向けて。

「はい。お目当てはこれ？」

カナお気に入りの狐の尻尾をモチーフとしたファーを。

「…ふわふわニャー。もこもこニャー…」

緩みきつた笑顔で、ファーを摘まんだり握ったり擦ったりするクー。その周りには、お花畑にも似たようなものが舞っていた。

「…ん、うう…」

そんな幸せそうなクーをシオンが眺めていると、カナが殴られた頭を押さえながら起き上がってきた。

「シーオーン？ なにもあんなに強く殴る必要ないよねー？」

恨めしい声を上げながらシオンへと迫るカナ。

カナの後ろに見える修羅を確認したシオンは、両手を精一杯掲げて降参の意を表す。

「悪かった。僕が悪かったから！」

「…たく…。あれ？ 槍は？」

息を吐きながら落ち着くと、ようやく背中 of 違和感に気づく。

「あ、レストーションならあそこにあるよ」

「何であんな所に移動して……シオン。あれはなに？」

「ふにゃー…」



カナが指差した場所には、地面にころころと転がりながらフアーに抱きつくクーの姿があった。

「見たままだけど？ よかったじゃない。仲間ができてさ」

「いやいやいや。さすがに私はあそこまでじゃないはず……」

「いいじゃん、認めちゃえば。実際その通りなんだから」

「……どの口がいつか、どの口が！」

またもカナの逆鱗に触れたシオンは、その頬を盛大に引っ張られていた。

## 新しい仲間（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 兄妹の別れ 少女の旅立ち

「はぁ…はぁ…はぁ…」

「…うん。動きの無駄もなくなってきたし、何より剣に重みがある。…強くなったね、リイナ」

鍛練場での小休止。

肩で息をするリイナに対し、レイソルは汗はかいているが涼しい顔で妹の成長を喜ぶ。

そんな兄は、一息つくと練習用の剣を壁に置き、リイナに手をさしのべる。

「はえ？」

「ご飯食べに行こうか。お腹、空いてるだろ？」

「は、はい！ 行きましよう兄様！」

笑顔と共に差し出された手を、リイナは強く握りしめた。

モグモグモグ…

「…そう言えばリイナ。俺はこれからしばらく家を空けるんだけど、リイナはどうする？」

ハーキュリー家の食堂の中、食事中にレイソルがそう切り出した。

「え？ 兄様、どちらに行かれるんですか？」

「ちょっと帝国にな。時期的なものもあるが、大半は噂のせいだ。これを期に帝国との関係を密にする狙いがある」

リイナの疑問に、いままでの優しい顔ではなく、王国騎士団団長としての顔で答えるレイソル。

空気が変わった兄に、リイナは佇まいを急いで直す。そのせいで、食べていたものが喉に詰まり噎せてしまう。

「んぐ！ …ごぼっ、ごぼっ！」

「おいおい。大丈夫か？ リイナ」

「は、はい。大丈夫です。すみません」

「で、だ。俺は帝国に定期連絡と先触れとして赴くから、明日にでもこの家を出る。それをリイナに伝えたかったんだ」

「そう…ですか」

一月に一度程度行われる、王国と帝国の騎士団会議は、回を重ねるほどに会場の場所が変わる。そのため、どの国の領土で行うかは分かってても、帰ってくる日数は分からないのだ。

一度、二ヶ月も兄が帰ってこなかったこともあり、リイナとしては面白くない報告だった。

「でさ、俺の知り合いに面白い人がいるんだが、会ってみないか？  
もちろん連絡はこちらですよ」

少し落ち込んでいるリイナに、レイソルが楽しそうに笑いながらリイナに問いかける。

「面白い人…ですか？」

「そう。魔導召喚師で、凄腕の人なんだ。ユフェルニカ・シーファスって言ったら聞いた事あるだろ？」

ここエスカレルニア王国で、もっとも強く、もっとも気難しいと言われている人物だ。

気に入らない者には、名前すら教えず無視し、もしも名前を呼ぼうものなら、氷魔法で氷付けにされると言われている人物である。

「知ってますけど…。その人が会ってみるかどうかって人ですか？」

「その通りだよ。確かに気難しい人かもしれないけど、話してみるといい人だよ？」

「へー。って言うか、何でそんな人が兄さんの知り合いなんですか？」

「ん？ ああ、前に騎士団での訓練中の人命救護を手伝ってもらったんだ。その時にね」

騎士団といっても魔法を使える者はたくさんいる。その者達のみを集め、集団で訓練を行っていた時に事件は起きた。

一人の団員が魔法を暴発させたのだ。

暴発させたのは炎の魔法で、暴発によって荒れ狂う炎が団員を焼くと言う時に、突然その炎が凍った。

燃え続けたまま凍りつく炎に、誰もが呆けていた頃、一匹の召喚魔が現れた。人魂のように燃える体の中心に、睨む猫の顔が見える『フレムニユート』と言う名の魔物が、ふわふわと訓練場を漂う。

「キュー…？」

愛らしい声を上げると、フレムニユートは召喚魔特有の光を放ちながらかき消える。

そして、その魔物が消え去った後に彼女は現れた。

「怒られたよ。それはもうすごい勢いでね。『あんたたちねえ！魔法の訓練するんだったら、熟練者の立会いの元やりなさいよ！監督者が魔法の素養が無い者って、ありえないわよ！』ってさ」

「うわあ…。なんだかすごく想像できます…」

「でね？ 後日礼をって言ったらいらないって言われてさ。その時はそれが当然かなー、って思ったんだけどビックリな事を言い出してね？」

「ビックリな事、ですか？」

「うん。『あんたが面白いと思う奴を連れてきなさい。あたしのいい暇つぶしになるようなね』って言ってくれたよ。彼女は」

「うわー、なかなか面白い事を言いますね…。って、そんな人の所に私を紹介するんですか！？」

それまで兄の話を感じしながら聞いていたリイナは、ようやく話に追いついてテーブルから身を乗り出す。

「そうだよ？ だって、こっちの騎士団から何人が送ったんだけど、面白くないの一言で送り返されてね。こっちとしては結構困ってたんだ。それに、リイナにもそろそろ旅でもして外の世界を見てもらいたいって言う、父上や母上のお達しだからね」

さらっと重大な報告もかますレイソル。特に何の問題もないように聞こえるが、可愛い愛娘に対して旅に出ろと言う親も親である。

「えー、父様も母様も簡単に言ってくれますね…」

「大丈夫なはずだよ？ それに、巷では二人組みの男女のトレジャ―ハンターが名を上げていると言う噂もある。その人達に協力を仰いでも良いと思うよ」

「トレジャーハンターですか…。はあ…分かりました。このリイナ・ハーキュリー、その魔導召喚師のもとに向かいます」

「そう言ってくれると思ってたよ。…こんな事を妹に頼むのは変かもしれないけど…聞いてくれるかい？」

終始笑っていたレイソルが、急に真面目な顔になって妹に語りかける。

「はい、なんですか？兄様？」

「さっき少しだけ触れた話題だけど、リイナは噂を知ってるかい？」

「噂、ですか？ うーん…色々なものがありすぎて、どれがどれだか…」

「あー、それはすまない。騎士団の皆にもよく言うておくよ。まあ、その中でもこの情報はあまり知られていないんだ」

首をかしげて思い返そうとするリイナに、レイソルは手をあげて謝罪する。だが、その真剣な眼差しはしっかりとリイナを捉えていた。

「（兄様の騎士団でのお顔…久しぶりに見ました…）あまり、と言う事は騎士団のみと言う事ですか？」

「正確には違うが、そう受け取ってもらっても構わないよ。リイナもこの世界の歴史、月の信仰については知ってるだろ？」

「はい。朱の月エスカレルニア、蒼の月フォーゲルノート。この二つの月の信仰によって二国ができたって」



「そう。でも、その月に対する信仰は今となつては無いに等しい。その事を憂い、月の信仰を回復させようとする過激派がいるんだ。…リイナにはその調査を行つてほしい」

真剣な眼差しを緩め、最後はただ妹を心配する兄の目になって見つめるレイソル。

「…分かりました。その任務、しかとお受けいたします!」

「頼むよ。王国、帝国ともに上の身分の人達にも過激派はたくさんいるんだ。…元々は別々の信仰を持つ同士、下手をすれば戦争にもなりかねないからね」

戦争。その単語を聞いた時、人知れず体が震えるのをリイナは感じた。

人が人を殺す、憎しみと理解の浅さの結晶。それが戦争だと、教えられてきた。人の心を蝕み、狂気に走らせるものだとも。

「そんな…」

「でもこれはあくまでも可能性の話だ。…絶対にそんな事はさせない。王国騎士団団長として誓うよ」

拳を握りしめ、決意の表情で語るレイソル。

「ああ、この話はくれぐれも内密にね。一般市民には絶対に聞かれないように」

「はい。分かりました」

落ち込んだ表情のままだが、しっかりと返事を返した事にレイソルは満足し席をたつ。

「この場所に行くといい。彼女行き付けの酒場兼宿屋らしい。薄い金色の髪を二つに束ねた少女だから、すぐに見つかると思うよ」

部屋を出る間際、レイソルはリイナの前に一枚の紙を置く。そこには、非常に簡単だが地図が描かれており、その酒場には赤丸が印されていた。

その紙を大事そうに折り畳み、懐へとしまっリイナ。

俯き気味だった顔をあげた時、彼女の表情にくもりはなかった。

## 兄妹の別れ 少女の旅立ち（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 少女達の邂逅

「えーっと…。地図ではこの辺りのはずなんですが…」

身支度を終えたリイナは、早速兄に言われた通りに人を、正確には教えられた店を探していた。

「…困りました。全くわからないです…」

地図を書いた紙を片手に頭を抱えていると、二人組の男が声をかけた。

「ん？ どうした、嬢ちゃん。こんな辛気くさい所でよお」

「暇なおじさんたちと遊ばねえかい？」

ニタニタと笑いながら近づく二人の男。普通なら生理的嫌悪感を覚える所だが、リイナもその例に漏れず、ものすごく嫌そうな顔をした。

だが、利用できるものは利用しろと思い、逆に男たちに話しかける。

「え？ 暇ではないですけど…。あ、ここに描いてあるお店って知ってます？」

「あ？ そんな事どうでもいいからさあ。いい所に行こうぜ？」

「そうそう」

「そうですか…。なら、他の人をあたります。ありがとうございました」

男たちの言葉を完全に無視しながら、リイナは用がすんだと踵を返して歩き出す。

「なっ！？ …嬢ちゃん、舐めた事してくれるじゃ…」

「鬱陶しいです。消えてください」

抜き打ち一閃。腰に履いた剣を、振り返りながら遠心力を利用しながら振るう。所詮はゴロツキ。リイナの動きが見えるはずもなく、その刃に成す術もなく倒れた。

「お、おい！ しつかりしろ！」

「大丈夫です。峰打ちですから。…さ、この場所を知ってるなら案内してください。知らないなら…消えてください」

剣を鞘に納めながら凄む。

慣れない事をしたと心の中で悔やむリイナだったが、男は面白いように怯えながら場所の説明をして、気絶した男を担いで逃げていった。

「逃げるの速っ！ …ま、話も聞けて場所も分かったんです。ラッキーですね」

喜びを体で表すリイナ。その姿は、ずいぶん場所に対してミスマッチだったが、誰も気にする者はいなかった。

カランカラン…

酒場の扉についた鈴が、乾いた音を鳴らして来客を知らせる。

リイナは初めて見る酒場の雰囲気、キョロキョロと辺りを見渡しながらテーブルに近づく。

「…いらつしやい。あんた、こちら辺じゃ見ない顔だが、誰か探してんのか？」

店のマスターとおぼしき大男が、リイナに話しかける。

「はい。えーっと、ユフェルニカ・シーファスさんを探して」

リイナがそう答えると、マスターは頭をを抱えて大きなため息を吐く。

「はあ…。お前さんも…。頼むから店を壊さんでくれよ…。おい！ シーファス！ あんたに客だ！」

泣きそうな顔で愚痴ると、大声を張り上げて目的の少女に声をかけ

る。

「じゃあ、あとは任せたぞ。ワシは奥に引っ込んでるから」

「え？ それってどういう…」

「あなたね？ あたしに用がある客って言う奴は」

マスターが店の奥に消えたのと入れ替わりに、二階から少女が現れた。

薄い金色の髪を二つに束ね、挑戦的な翡翠色の瞳でリィナを見つめている。

「はい。兄様の紹介でやって来ました」

「兄？ …ああ、あなたレイソル・ハーキュリーの妹なのね？」

「はい。そうですけど…」

「へえ…。あの男も律儀ねえ。すでにこの事が暇潰しだわ」

顎に手を当てて笑う姿はとても絵になっており、まるで一枚の絵画のようだった。

「あのー、私は何をすればいいんでしょうか？」

「そうね…。あなたの兄は何て言ってあなたを送り出したの？」

「えっと、『お前もそろそろ旅でもして世界を見るべきだ』って。

父様も母様もそれに同意してるって言っていました」

「ふーん…。ま、あなたにしてもらうのは私の旅のお供よ」

「はい？」

「今までの奴らなら、追いつかなくて叩きのめしてたんだけど、あなたは楽しそうなもの。見ただけで分かるわ」

獲物を見つけた時のような楽しそうな顔で言うユフェルニカ。その話を、リイナは目を点にしながら聞いていた。

「分かる？ 何がですか？」

「あなたの体から感じる、大きな魔力の話よ。かなり大きい、一介の剣士が持てる量ではないわ」

「ええ。私は生まれながらにして強大な魔力を持って生まれたと聞きました。そして、剣士の家系であるがゆえに聖霊の加護を受けられなかったと」

「…だからね。わざわざ自分の妹をこんな所まで送りつけたのは…。結構強かじゃない、王国騎士団長さん？」

「はい？」

レイソルの思惑に気づき、含み笑いをこぼすユフェルニカ。その真意が分からず、リイナはただ首をかしげることしか出来なかった。

「つまり、あなたの兄はあたしに魔力の制御を学べと言いたいんじ



やないかしら？ 全く、あたしをこき使うなんて初めての男よ？」

「え？ じゃあ、もう魔法の暴発を気にしなくなれるんですか？」

「それはあなたの努力しだい。どうなるかなんて私にも分からないわ」

「そう、ですか…。でも、頑張ればみんなに迷惑をかけなくてすむように…」

俯いて思考の海へと没頭するリイナ。だが、その暗くなった表情もすぐに明るく、まっすぐにユフェルニカを見つめ返す。

「…私、やります。あなたと一緒に旅に出て、兄様に強くなつたつて褒めてもらうんです！」

「そう。じゃあ、行きましようか。あたしの名前は、知ってるだろうけど、ユフェルニカ・シーファスよ。ユフィーと呼んでくれて構わないわ。あなたは？」

「あ、私はリイナ・ハーキュリーです。リイナって呼んでください」

「分かったわ、リイナ。後、敬語なんていらから。気軽に喋ってくれて構わないわよ？」

「気軽に、ですか？ でも、ずっとこの喋り方なので、このままが良いんですけど…」

「…なるほど。ならいいわ。無理強いをする気はないし」

「じゃあ、旅の仲間として…」

そう言つて手を差し出すリィナ。その手を見て、ユフィーは眉を顰めて難しい表情を浮かべる。

「旅の仲間じゃなくて、私の扱いとしてはお供、何だけれどね。…ま、いいわ。よろしく、リィナ」

「はい！ ユフィー！」

二人の少女は、笑つて手を握り合つた。

## 少女達の邂逅（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

### 三人と二人

「さーてと、これからどうしたい？ シオン、クーちゃん？」

露店街から抜け、宿屋などが揃う宿場を歩く最中、カナが唐突に話を打ちかける。

「どうって…。僕らは僕らの目的があるんだ。それを達成するために動くんだろう？」

「クーは二人についていだけよ？ だから、行き先は二人次第」

「うーん…。確かにそうだねー。でも、私達が欲しいものは、さすがにこの人数は無理だね…」

「うん。人数と言うより、戦力だね」

カナの判断に付け加える形でシオンが同意する。

だが、そんな中でクー一人が首をかしげていた。

「二人の欲しいものって、いったい何だニヤ？ やっぱ、トレジャーハンターとしてはお宝なの？」

「いや、違うよ。そんな分かりやすいものじゃないんだ」

「そうそう。それに、二人じゃなくてほとんどシオンだけだしね」

「そうなの？ クーはてっきり二人が欲しいものかと思ったニヤ」

「まあ、あの言い方じゃ仕方ないよね。…うーん……どこか落ち着ける所で話そうか。この話は長くなるし」

「シオン？ いいの？ 話しちゃって？ 下手したら…」

「いいよ。仲間なんだし、どうせすぐにバレるさ」

「…はあ…。やっぱりシオンね。嘘はつけない」

「ははは。ごめん」

「????」

クーの疑問をやりわりと避けていた二人だったが、シオンの一言によりカナの表情が曇る。

だが、憑き物が落ちたような晴れやかな顔で告げるシオンに、カナは二の句が継げなくなつて反論を放棄した。

そんな二人のやり取りを見て、クーの頭には？しか浮かばなかった。

「さて、あなたと旅するのは決定した訳だけど…。早速旅の目的

を決めないかね」

「目的、ですか？」

「ええ。ただ闇雲に旅をしても仕方ないでしょう？ 折角だから何か楽しめるものが無いと張り合いが無いわ」

やれやれと言った様子で首を振るユフィー。その仕草を見て、リイナは何かを考えるように顎に手を当てて俯いていた。

場所としては、二人が出会った酒場兼宿屋から移動はしていない。奥に逃げるように引っ込んでいたマスターも、被害が無い事を悟ると表に出てきていた。

「…それならユフィー？ 私の用事に付き合わせる事になるんですが、いい案はありますか？」

「いい案？ 言ってみて？」

「はい。えっと、これも兄に頼まれた事なんですけど…」

面白そうだと食いつくユフィーに、リイナは兄に頼まれた事を話す。

噂の事、兄の遠征、全ての事を。

「へえ…。月の信仰を取り戻そうとする過激派集団ねえ。面白い話が聞けたわ」

「ユフィー…。笑い事じゃないんですよ？」

リイナの話を通り聞いた後、クククと含み笑いを漏らすユフィー。それを呆れ顔で咎めるリイナだったが、次の瞬間ユフィーがリイナにとって最も重要な一言を発する。

「…その過激派集団となら、あたしは前に一度接触してるわ。…それも帝国領でね」

「え！？ それ、本当ですか！？」

「ええ。その過激派に協力してくれとも言われたわね。確か昔の文献にも記されているけど、ここエスカレルニアよりもフォーゲルノートの方が元々信仰は深かったの。だからじゃないかしら。帝国領で出会った訳は」

「なら、帝国が発端だと言っんですか？ この噂は」

「そうだ、と断言は出来ないわね。ただでさえ情報が少なすぎるの。そう思うのは早計よ？」

「そうですね…。あ、でもこの事を兄様に伝えないと…」

「どうやってよ。兄がいる会談場の場所は知らないのでしょうか？」

席から立ち上がり店から出て行こうとするリイナを、ユフィーがいつの間にか頼んでいたハーブティーを飲みながら制する。

「あう…。そうでした…」

「分かればよろしい。場所さえ分かれば、あたしが召喚魔で伝えてあげられるんだけどね」

「うーん…。あ、そう言えば…」

万策尽きたと、二人して頭を抱え込んでしまう。まあ、ユフィーは足を組んでカップを傾けているのだが。

「ん？　どうしたの、リイナ？　何か思いついたの？」

「いえ、思いついたと言うより思い出しまして…。確か『最近名を上げている二人組みのトレジャーハンターがいるから、その人達にも聞いてみたらどうだ』って兄様に…」

「兄様さまさまね…」

「当然です！　だって私の兄様ですから！」

「あー、はいはい」

拳を握りしめて身内自慢を始めるリイナに呆れ、ユフィーは棒読み言葉返すしかなかった。

「（でも、そのトレジャーハンターとやらには会う必要がありそうね…）ねえ、その二人組の特徴は何か聞いているの？」

「え？　…特徴は、男女で男が魔導師、女が槍使いですけど…」

身内自慢を切り上げ、ユフィーに説明を始めるリイナだったが、その視線はフラフラと定まっていなかった。

「職業よりも他に何かあるでしょう？　髪の色、瞳の色、人相とか。



「まさか、聞いていないの？」

疑いの目をもってリイナを見つめるユフィー。

その手にはなぜか、情報屋の男に食らわせようとした紫電が。

「えーっと…。ユフィー？ 聞いてないって言ったら、どうするんですか…？」

「そうね…。少し痺れてもらっただけよ。少しね」

伏せ目勝ちに問いかけるリイナに対し、ユフィーは真っ黒い笑みを浮かべながら手に纏わせた紫電を見せる。

「いやー、それだと痺れるだけじゃないんじゃ…」

「大丈夫よ。加減はするし、あなたには魔法の耐性もありそうだし」  
「」

「いやいやいや！ 大丈夫じゃないですって！ しかも何でそんなに楽しそうなんですかぁー！」

「楽しいからに、決まってるじゃない！」

「いっただだ！ し、しびれるー！」

リイナは涙目になりながら抵抗を繰り返したが、その抵抗も虚しく雷魔法をその身に受けるのだった。

「いっただだ！ し、しびれるー！」

所変わって、ここはユフィーとリイナがいる店の前。

落ち着ける所を探して宿場を探していたシオンたちがそこにいた。

「ニヤ！？ 今のつて、悲鳴じゃないのかニヤ？」

その店の中から聞こえてきた悲鳴にも似たリイナの声に、クーが尻尾を逆立てながら反応する。

「はあ…。どこの町もこういう場所に来ると一緒ね。…クズしかない」

その手にはなぜかレストーションが握られており、カナの体からも殺気にも似た闘気が溢れていた。

「…ははは。…いい加減しまいなよ、色々とさ」

「いーやーだー！ またあんなのが来たら嫌だもん！」

苦笑を漏らしながらカナに注意するシオン。だが、カナは槍を胸に引き寄せて拒否する。

「まあ、分かるのは分かるんだけどさ」

「…逆に相手に同情したくなるのニヤ」

そんなカナを見て、シオンとクーは顔を見合わせながらため息を吐く。

その間に何があったのかと言うと、カナがナンパにあったのだ。ナンパと言っても、ほとんど恐喝に近い事をしてきたバカな二人組の男に。

その行為に切れたカナが、レストーションで半殺しにしてしまったのだ。

その時のカナは、シオンが水魔法で頭に水をぶちまけてやるまで止まらなかったそうなの。(クーはそんなカナに怯えていたため、何も出来ていない)

「な、なににせよ、宿屋についたんだし、さっさと入らない？」

やり過ぎたと自覚しているのか、少し慌てながら店の扉を指差すカナ。

そんな珍しく慌てるカナを見て、シオンとクーは笑いあった。

### 三人と二人（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 出会い 世界の理

「あー、うー。まだ髪の毛がパリパリいつてますよー…」

ようやくユフィーの雷魔法の呪縛から解き放たれたリイナが、ボサボサになってしまった髪の毛を直しながら愚痴る。

その雷魔法を放ったユフィーは、そ知らぬ顔で二杯目のハーブティを飲んでいた。

カランカラン…

そんな二人の後ろ側から、来客を知らせる金の音が鳴る。

「…いらっしやい。今日は新顔が多い日だな」

その来客を迎えるため、無愛想ながらもマスターが出てくる。

「新顔？ あ、三人ですけど、空いてますか？」

「ああ。適当な所に座ってくれ、注文は後からとる」

「分かりました」

マスターの言葉に淡々と少年が答えると、入ってきた三人は手ごころな席へと座る。

「あの一、ユフィー。あの三人の人達…」

「魔導師と槍使いね。獣人の子は知らないけれど、あの男…」

「どうしました？」

「いえ、ちよつとね…。（あの男、魔力総量はリイナには劣るけれど、あの魔力の流れは見た事が無いものだわ…）」

目を細め、他の二人と親しげに話す男を睨むユフィー。男に見えた魔力の不規則な流れを突き止める為に、さらに睨みを利かせていると、目の前にリイナが現れた。

「…ちよつとリイナ。どきなさい」

「駄目ですよ。そんなに怖い目で睨んじや」

「…うるさいわね、私はあの男に興味があるの。だからどいて」

「そんなに興味があるなら聞けば良いじゃないですか。あのー！」

「ちよつと！ リイナ！」

凄むユフィーもなんのその。手を上げながら三人の元へと歩いていくリイナ。その突飛と取れる行動にユフィーは驚いて声を上げるだけだった。

「？ はい、なんですか？」

「えっと、あなた達はトレジャーハンターの方ですか？」

「うん。確かにそうだけど…。君は？」

「あ、申し送れました。私はリイナ・ハーキュリー。あなた達に伺いたい事があるのですが」

「はあ…。あ、僕はシオン・セナ。で、こっちの二人が…」

「カナ・コルセルニアよ。ハーキュリー家のご令嬢さん？」

「クーはクーだニヤ。ついさっきについて行く事になったから色々聞くなら二人にするといいよ？」

「で、聞きたい事って何かな？ ハーキュリーさん」

お互いの自己紹介も済んだ所で      まだ一人済んでいないのだが

シオンが人当たりのいい笑顔を浮かべてリイナに問いかける。

「ではお伺いします。あなた達二人が巷で有名なトレジャーハンターですか？」

「はい？」

「いえ、ですから…」

「あなたねえ…そう単刀直入に言うものではないでしょう？」

リイナの要領を得ない質問に、シオンとカナの二人の声が重なる。相手が理解していない事を認識できていないリイナは、さらに質問を続けようとするが、そこにユフィーが現れて止められる。

「…あたしの事は知っているでしょう？ 特にリイナをハーキュリ

「家のご令嬢だと言ったあなたは」

「...？ あー、確か召喚魔導師の！」

挑発するように、ユフィーがカナに視線を向ける。カナは最初は首をかしげていたが、後になって手を叩いて納得した顔をする。

「ま、分かってくれたのはいい事だけれど、あたしの興味は今あなたには無いの」

「へ？」

何かあると予想して身構えていたカナは、予想に反したユフィーの言葉に間抜けな声を出してしまう。

そして、そのユフィーはと言うと他の者には目もくれずに歩き出した。

シオンに向かって。

「...あたしが今興味を持っているのは、あなたよ」

シオンを指差して宣言するユフィー！。

「え？ 僕？」

自分を指差して、キョロキョロと周りを伺うシオン。

だが、周りの者達は手を振るか首を振るばかりで、シオンはもう一度自分を指差して答えた。



「僕、ですか？」

「そうよ。あたしはある程度相手の魔力を感じる事ができるの。ま、魔導召喚師の特権って奴かしらね？　…それで、あたしはあなたの魔力に違和感を感じたの」

「シオンの魔力に違和感？　まさかシオン、病気とかなの？」

「それは嫌ニャー！」

ユフィーの言葉にカナがそう反応すると、クーがシオンへ飛び付く。シオン、この短期間でずいぶんなつかれたようである。

「シオン！　大丈夫なのかニャー！？」

「うわわ、大丈夫だって。病気なんかじゃないよ」

「ええ。この男は病気なんかじゃないわ。ただ、あたしが言えるのは、魔力の流れが他の者と微妙に違う事くらいかしらね」

「え？　それってどういう事ですか？　私の時は何もなかったですよね？」

事の次第を静観していたリイナだったが、ユフィーの言葉を聞いて心配そうに訪ねる。

「ええ。リイナには説明しておきましょうか。魔法の特性と言うものを」

そこからはユフィーの独演会だった。

リイナはもちろんの事、魔法の適正がないカナとクーも、食い入るように話を聞く。そんな中、シオンだけが影のある表情でユフィーを見ていた。

「知ってはいるだろうけど、この世界の魔法は根元である聖霊の九属性からなっているわ」

「はい。炎、水、氷、風、雷、土、光、闇、時ですよ」

「その属性一つ一つに、ある波長があるとあたしは思っているわ。ま、これはあくまでも魔導召喚師の話だけれどね」

「波長？　どういう事なの？」

「あたしに見えているのは、その者が得意とする属性、つまり強く聖霊の加護を受けた属性が見えるのよ。炎なら烈火のごとき揺らめき、氷なら冷たくて固い、見たいにね」

「へー。クーは殴るか、飴を作るしかできないからよく分からないよう」

「そこで、この男にはそれが見えないの。この状態なら、特に得手不得手もないごく普通の面白くもなんとも無い魔導師なんだけれど、見た事のない揺らめきがこの男からは感じられるの」

「……………」

その『この男』であるシオンは黙ったまま。ただ無言でユフィーの視線を受け止めていた。

「そうそう。さつきリイナが言った九属性の中の時は、完全に例外よ。それだけではどの相克にも関与しない、特別な属性なの。それに、その魔法が扱える術者もないわ」

「特別……。じゃあ、私が使う無属性とも違うんですか？」

「当たり前よ。無と言うのは何も無いのよ？ それこそ相克からは外れているわ。それに、無属性魔法は魔力が高いものなら誰でもできるの」

「じゃあ、なんで例外なのよ。相克から外れるって言ったし、術者がいないって事は加護が無いって事なの？」

「考えてもみなさい。時は必ず上位にある存在よ？ 例えば私の氷魔法だと、氷は水に戻され、その水は蒸発してなくなってしまうわ……いえ、加護は、受けられるはずよ」

「え？ それってどういう事？ 珍しくて例外なのにかニヤ？」

「ええ。確か、昔ある血族のみが時の魔法を使っていたはず……」

「……もういいだろ？ ここからは僕が話す。二人にも話さないといけなかったし、ハーキュリーさんには知っていてほしい話だから」

ユフィーの言葉を、シオンが椅子から立ち上がりながら遮る。

「へ？ 私ですか？」

突然自分の名前を呼ばれた事に驚きながらも、きちんと言葉を返すリイナ。

「僕の勘だと、ある噂の件で声をかけてきたんだよね？」

「はい。その通りです」

「君も、それでいいよね」

そんなシオンの言葉に、ユフィーは薄く笑って話を促すように手を振る。

「君は、分かってるの？ 僕の……これから話す内容を」

「いいえ。大体の察しはついてはいるけれど、やっぱり本人の口から聞いた方がいいじゃない？」

「（確信犯じゃないか……）」

腕を組ながらそう答えるユフィーを見て、シオンはしてやられたと肩を落としてしまう。

「…ふう。ま、いいか。…あー、でもどこから話せばいいんだろ…」

ため息を吐き、気持ちを落ち着かせようとするシオンだが、考えが纏まらずに頭をかきむしる。

だが、悩むシオンの肩に手が優しく置かれた。

「別に構わないでしょう？ 元々、私たち二人に関しては…いや、私限定か。もう何を聞くのか分かってるんだしさ。ま、魔力云々は元々分かんないけどね」

「カナ…ありがとう」

カナからでた言葉に、シオンは驚いた顔をするが、それも一瞬。すぐに気を取り直して感謝の言葉をのべる。

「…うん。うだうだ悩んでも仕方ないよね。話すよ、全部」

先程カナとクーに見せた晴れやかな表情で、そう宣言するシオン。

シオンのその一言で、全員の注目がシオンへと集まる。

「僕は…僕の本当の名前はシオン・セナ・ファルカス。フォーゲルノート帝国第一王子にして王位継承者。そして、この世界で唯一『時魔法』が使える者だよ」

「帝国…第一王子…」

「シオン、偉い人だったのかニヤ？」

シオンの告白に、リイナとクーの口から驚きの言葉が上がる。ユフイーとカナに関しては、元から知っていた事と予想がついていただけに、あまり驚いてはいなかった。

「うーん、偉いかどうかって言われると微妙だね。僕は家を捨てた身だから」

「家を捨てた？なら、あたしが帝国にいる間に聞いた『王子出奔』の噂は本当だったのね」

シオンの発言に、ユフイーが昔の記憶と照らし合わせるように同意する。

「本当って言うか、ただの家出なんだけどね」

「…その大掛かりな家出を手伝った私の身にもなりなさいよ」

「ごめんごめん。感謝してるってば」

「手伝った？ どういう事ですか？」

カナの発言に疑問を持ったリイナが、その部分について質問する。

「カナは僕の家出を手伝ってくれたんだ。…間接的にだけけどね」

「宝探して王宮に忍び込んだ時に、シオンに見つかっちゃったのよ。でも、その時のシオンは家出しようとしてる真っ最中。当然、王宮の警護の奴もついてきてたわ」

お互いに顔を見合わせ、その時の状況を話す二人。シオンは少し楽

しそくに、カナは少しめんどくさそうに話す。

「で、警護の人達を撒く途中にカナと出会って、カナも巻き込んでの逃走劇になったんだ。僕は連れ戻そうとする警護の人から逃げて、カナは泥棒として追いかけられたんだ」

「あの時はかなり理不尽に追いかけられたわね。だって『盗賊の女がシオン殿下を拐っていったぞ!』って言われながら追いかけられたんだから」

だんだんとその事に腹が立ってきたのか、頬を膨らませてシオンに詰め寄るカナ。

「うわー、それはまたきついですね。理不尽と言っか、当然と言っか…」

「でも、仕方ないと思うニヤ。そうした方が楽だって聞いたことあるニヤ」

カナの言葉にリイナは同情し、クーはなぜか頷いていた。

「一国の王子を拐う女、ね。面白いじゃない?」

面白い事が聞けたと笑みをこぼすユフィー。だが、その笑みはすぐに消える事になる。

「そう言えば、逃げている最中に時の魔法は使わなかったんですか? そうすれば、もっと簡単に逃げれそうなのに…」

リイナがある種当然の疑問を投げ掛ける。

その疑問に答えたのは、先程まで薄く笑っていたユフィーだった。

「それは無理な話だと思うわよ？ 時魔法は基本的に術者を蝕み、最終的には殺してしまう魔法『失われた魔法』ロストマジックと伝えられているから」

「まあ、その言い方は少し大げさだけど、ほぼその通りだよ」

ユフィーの言葉に少し訂正を加えながらもシオンは同意する。

「時魔法は基本的に異質なんだ。時を操り、全ての現象を生み出す事は出来なくても終わらせる事は出来るんだ。∴人の命すら操れる、禁忌の魔法と言ってもいいものだよ」

「人の命すら操れる禁忌の魔法……ですか」

「そう。だからこそ時の魔法は昔から隠されてきたんだ。『例外』と言う言葉を使ってね」

寂しげに発せられるシオンの声に、全員が黙ってしまう。

そんな周りを見て、シオンはため息を吐きだすと淡々と語りだした。

自らの過去と帝国王家に伝わる伝承、月の信仰を回復させようとする集団『ルナニスクールメア』について。



## 出会い 世界の理（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## シオンの過去

「どうかなさいましたか？ 父上」

一年ほど前、シオンは父、クルト・シン・ファルカスに呼び出され、玉座の間に呼び出されていた。

「…お前に話したい事があってな。わざわざ呼び出してすまない」

「いえ。それは構わないんですが…」

玉座から立ち上がり、ゆつくりとシオンへと歩み寄るクルト。その父の動きに、シオンは少し眉を顰めていた。

はつきり言って、シオンは父の事が苦手だった。

絶大な権力を持ち、この帝国の行く先を牛耳る国王。これだけなら、ただの王となんら変わらない。だが、父の自分に対する態度が苦手だった。

一歩後ろに下がった状態で息子の調子を窺う父。全ての台詞が作られたものに感じ、今まで一度も腹を割って話した事は無い。

それがシオンとクルトの関係だった。

「話したい事と言うのは王位継承の儀についてだ。それについては、大して問題もなく行われる予定だ」

「そう、ですか。…分かりました」

この王位継承という儀式もシオンを昔から縛る鎖だった。

シオンには母親がない。シオンが生まれて数カ月後に死んだと父から聞かされていた。

そのため、側室制と言うものが存在しない帝国王室では、シオン一人が王位継承権を持つ者なのである。

そして、その確固たる現実にはシオンを縛る鎖となり、自由と言う翼をシオンから奪っていた。

「その儀に関する事で、お前に見ておいてほしい物がある。…ついてきてくれ」

「え？ は、はい」

珍しく主導的に動く父に、シオンは少し反応が遅れながらもついていった。

カツカツと靴の音が響く講堂を、シオンとクルトが歩く。

シオンがつれてこられたのは、今はほとんど使われていないはずの寂れた講堂だった。その講堂の奥は宝物庫になっており、シオンとしてはその宝物庫に用があるのだと思っていた。

だが、その予想は簡単に裏切られる事になる。

ガゴン…

「え？」

「さあ、こつちだ」

宝物庫にいたる扉に手をかけると思っていたシオンは、父が突然何も無い壁に手を当てた事に驚く。だが、その壁は鈍い音をたてながらへこみ、その奥にある薄暗い階段を出現させる。

その中に入る事を促しながら、躊躇無く足を踏み入れていく父に遅れないようにシオンは足を進めた。

その階段は深く、螺旋状に地下深くまで伸びていた。その石の螺旋階段を歩く音が響く中、クルトが唐突に口を開いた。

「シオン、今から見るものは王家に伝わるもので最も重要なものだ。我が一族、時の魔法を操る系譜に生まれ、その力を行使できる者として知っておかねばならぬ事がある」

「…分かっています。時の魔法の強さ、そして…その異質さを理解しておかなければ『死』を迎えると」

「そうか…。…ついたぞ。ここがお前に見てもらいたかった場所、時の魔法が扱える者しか入る事を許されない『時の祭壇』だ」

ロスト・タイムズ

父に促され、シオンが見たものは地下には似つかわしくない大きな鉄の扉だった。

「『時の祭壇』……なぜこんな物が王宮の地下に？　大きさ的にもありえない」

その扉は、薄暗い事もあって先が見えないほどに巨大である。唯一確認できるのは、小さく開いた二つの穴と大きな紋様だけだった。

「それは私にも分からない。ただ、先代の王から言われてきたのだ。『時の魔法扱えし者現れた時、この場所を教え、中にある真理に触れさせよ』と」

「中にある真理？　確かに、『失われた魔法』と呼ばれるものですから、何が出てきても不思議ではありませんが……」

「そう言う事だ。……そこにある二つの穴に手を入れて魔法を流し込めば扉は開かれるはずだ」

クルトが扉に開いた穴を指差す。

その穴を見て、シオンは少しためらった。このまま父の言う通りにしていいのかと。

基本的に、シオンは父を苦手としていたがその言葉は忠実に従っていた。それが正しいと信じていたし、信じさせられていたからだ。

それなのになぜ、今になって父の言う事を疑ったのか。それはシオン自身にも分からなかった。

「……………」

だが、その父の言葉に結局は従い、穴に手を差し入れる。そして、

その穴に魔力を、時の魔法を流し込んでいく。

「（悠久に流れる、時の調べよ。我が呼びかけに答え、その流れを止めよ…）」

発動の鍵である呪文を頭の中で唱えながら、体の中にある魔力を練り上げる。

すると、扉に描かれていた紋様が鈍く輝きだし、扉周りが振動する。

「…『時の破壊』」  
タイム・ブレイク

呪文を唱え終えると、紋様の輝きが一層増し、地下を揺らす振動も大きくなる。

そして、扉がゆっくりと開かれ、その中にあるものを見せ始めていく。鈍い音を立てながら開く扉の中に、シオンは足を踏む入れる。

「…これは？」

時の祭壇の中にあつたのは、少々小さいが珍しい金属製の机が一つ。その机の上には、ある物が置かれていた。

「…ネックレス？ でも、こんな紋様は見たこと無いな」

シオンが手にとったものは、丸型のプレートに十字架が彫られたネックレスだった。

銀細工のようだが使われている金属が違う、微力ながら魔力が感じとれるような雰囲気があった。

「他には…何も無いな」

他を見渡しても何も無い事を確認すると、シオンは外へと出る。すると、シオンが外に出た事が分かるように、開く時と真逆でかなりのスピードで閉まった。

その事に驚きながらも、ゆっくりと父の元へと歩き出すシオン。そんな息子を、クルトは微笑と共に迎え入れた。

そして、来た道を戻って講堂へと戻る。ようやく明るみに出た事で目を細めるシオンに、クルトは優しく言葉をかけた。

「よくやったな、シオン。我が一族の秘宝を良くぞ手に入れてくれた」

「一族の秘宝？　どういう意味ですか？　父上」

「言葉通りの意味だ。あの祭壇に封印されていた秘宝を、お前が取り戻したのだ」

「封印？　どういう事ですか、父上。僕はただ、時の魔法が使える者だからと…」

言葉の意味が分からず、父へと詰め寄るシオン。

「それは本当だ。封印については、その秘宝を扱える者がいなかったから封印していただけ。扱える者が現れれば封印を解く。当然であるっ？」

「まあ、確かにそうですが…」

シオンが手に持つネックレスを見つめながら渋々納得する。

シオンが納得した事を確認したクルトは、ネックレスについて語りだす。その忌まわしい過去と共に。



## シオンの過去（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 予兆

「その名前は『時の証』<sup>エディンズクロック</sup>と言う。時の魔法が扱える者しか着ける事が許されない、特別なものだ」

『時の証』。帝国王家に伝わる、最高の秘宝。

見てくれはただの十字架が彫られたネックレスだが、その材料には『魔法石』と呼ばれる生成困難な魔力結晶が使われている。

魔法石はそれ自身が魔力を持ち、それを扱う者の手助けをするように作られたいわばブースターのような物になっており、大変高価で知られている。

その魔法石が使われていると言う事は、この時の証はかなりの価値のある物という事になる。

「王の証としても使われる事からこの名がつけられたが、ただでさえ時の魔法が扱える者が少ない。そのため、誰にも触れられないように前の所有者が封印をかけたのだ。時の魔法を使って」

時の魔法は重複して発動すると、その効果が消えてしまうと云う欠点がある。それを利用した前所有者は、祭壇の扉を時の魔法使って時を止め、開けられないようにしたのだ。

そこに、新たな時魔法を扱える者が現れ、魔法を発動させると扉にかかっていた魔法の効果が消えるという仕組みなのである。

「ですが、なぜそうまでして他の者から隠したのですか？ 時魔法

を扱える者しか着けられないんじゃない？」

「…そこが問題なのだ。魔法石が使われている事を知った馬鹿な権力者が、時の証を持ち出し使用した事件があった。…だが、その権力者は死んだ。時の証の魔力に食われたんだよ」

「！ そんな…！」

シオンの質問に、暗い表情をしながら返すクルト。その過去を聞いたシオンは眼を伏せ、唇を噛み締める。

時の魔法が異質と『失われた魔法』と呼ばれる最大の理由は、間違った扱いをした瞬間に死ぬと言う扱いの難しさにある。

そもそも、適正の無い魔法を扱おうとしている時点で間違っているのだが、その反動が大きすぎるのだ。良くて悪くても死が待っている、これが時魔法の異質さだ。

「その事件以来、時の証は遠ざけられてきた。扱える者がいないのも手伝ってな」

「…ならば、なぜ父上は僕にこれを？」

父の顔にわずかに浮かぶ狂気の表情に、シオンは嫌な予感がしながらも問いかける。

だが、その選択はシオンを後悔させる事となる。なぜ、あの時に問いかけたのだらうと。

「決まっているであらう？ その力を使い、月の信仰を取り戻すの

だ」

「っ！　どういう事ですか父上！？　あの教団とは手をきつたはずです！　なぜ今ごろになってあのような連中の事を……ぐっ！」

父の発言にシオンは驚きの声をあげ、抗議する。

だが、どこか陶酔したような様子のクルトに、息子の声は届かなかった。その証拠に、目の前にいるシオンを魔法で弾き飛ばした。

「ふん！　お前には月がどういう存在か分かっていないようだな！　このエスカレルニアとフォーゲルノートの二つの月の存在がいかに偉大かを！」

「……ぐ……父上、何を！？」

床に転がったシオンを、憤りのこもった目で睨むクルト。そして、今まで父親に手をあげられた事のなかったシオンは、信じられないと言っ表情で父を見つめる。

だが、そんな眼差しはクルトには届かない。シオンを睨んだまま呪文を唱え、捕縛用の魔方陣を構築するクルト。

「お前は知る必要がある。唯一の時の魔法が扱える者、全魔導師の上位者として！　お前は、この偽りの世界を壊さねばならない！！」

「上位者？　僕はそんな者になったつもりも、世界を壊すことなんか望みません！」

「いいや、望まねばならない。全てを知った時、お前にも分かると

きが来る！」

構築されていた魔方陣が完成し、シオンを包み込もうとその光を揺らめかせる。

「全てを知った時？ 父上は奴らから、いえ『ルナニスクルメア』から何を聞いたんです！？」

その光に抗い、魔方陣から抜け出して父へと叫ぶシオン。

広い講堂に、親子の悲痛な叫びが響きあう。父親は息子に分かつてもらえない苦しみに。息子は父親の意図が掴めない悲しさに、ただ叫ぶ。

だが、その叫びもクルトの呟きによって遮られる。

「…この偽りの世界を正し、誰もが幸福で平和な世界『真世界』エンテレケイアへと…」

「…『真世界』…？ …まさか、ルナニスクルメアは…！」

クルトの呟きが耳に、脳裏に引っかかり考え込むシオン。だが、ゆつくりと考えている暇は無かった。

「…『土の鎖』アース・チェイン！」

「…はっ！ 父上！？ こんな場所で攻撃魔法なんて！？」

クルトの足元の講堂の地面が隆起し、地面から土色の巨大な鎖が出現する。

膨大な質量と共に迫る巨大な鎖を、すんでの所で気づいたシオンは防御用の結界、魔法障壁を作って防ぐシオン。

魔法同士のぶつかり合った余波が、全ての窓を叩き割る。それによつて生み出された土埃の舞う講堂に、クルトの嘲笑が響き渡る。

「くくくく…あーはっはっは！！ さすがは上位者と呼ばれるだけはある！ 魔力ではお前が私に勝てる道理は無いと言つのに、こうも呆気なく防がれるとはな！」

「くそ…！（どうする？ そう何回も混成属性魔法は使えない…。なんとかして父上の注意を逸らさないと…）」

クルトは、自らの魔法を防いだ障壁をシオンの時魔法によるものだと思い込んでいるが、それは全く違う。全ての魔法の属性が扱えるシオンだからこそできる技、『魔法混成』クロスマジックを使ったせいである。

この技は欠点を補い合う事こそが本質である。土には基本的に水と風が効果的だが、さらにその効果を上げる属性も存在する。炎や雷で土を焼けば、後はその力で押し流すだけなのである。

その条件を利用し、シオンは魔法障壁を二重に展開していたのだ。一つ目に炎と雷の障壁。二つ目に水と風の障壁と言うように。

「…私もこのような事は本望ではない。だが、お前のその力があれば真世界への扉は容易に…」

手を差し出し、微笑を浮かべながらシオンへと近づくクルト。それを拒むようにシオンがたたらを踏んでいると、講堂の外から警護の

者の警告が聞こえてきた。

「陛下！！ 殿下！！ 賊が王宮に侵入しました！ 王宮の奥へとお逃げくださいー！！」

「！ なんだと！？」

「（しめた！）… 『風の圧壁』！」  
エア・プレッシャー

それを逃げ出す好機と見たシオンは、講堂を押しつぶすように魔法を発動する。

発動した魔法は、巨大な大気の壁を作って対象をその大気の壁で押しつぶす魔法。その魔法を、講堂を押しつぶすように発動したと言うことは。

ズゴゴゴゴゴ……

当然、建物など簡単に崩れ去る。

「シオン！ 貴様！！ ええい！ シオンを捕まえろ！」

間一髪、崩壊する講堂から脱出したクルトは、部下の者達に指示を下す。国王の突然の命令に、皆一様に驚く者ばかりだったが、すぐに気を取り直してシオンを追う。

その様をゆつくりと眺めると、クルトはおもむろに歩き出す。玉座の間に向かって。

「…シオンよ。お前にならやれるのだ…。私には出来ない、この世

界を正す事が……」

そう呟きながらゆっくりと歩くクルトの背中には、ひどく寂しげなものだった。

「……これが僕の、知っている事全て。そして、カナに出会う前までの話だよ」

シオンがユフィーと同じハーブティーのカップを　　もつとも、ユフィーは砂糖たっぷり、シオンはそのままで飲むため同じとは言いがたい味になってはいるが　　テーブルに置きながら、そう言って話を終えた。

「ちょっと、シオン？　私と出会う前と言つか直前にそんな事があったの？」

話の中にあつた出来事と、最後の言葉を照らし合わせたカナが、シオンの肩を掴んでガクガクと揺らす。

「う、うん。って、言つか、揺らすの、やめて」

「あ、ごめんごめん」

謝りながらシオンの肩から手を離すカナ。



揺さぶりから解放されたシオンは、リイナに向き直って真剣な眼差しを向ける。

彼女にすべてを伝え、目的が同じだと言うことに。

「えーっと、話を聞いていたら分かると思うけど、君が調べている噂の団は、ルナニスクールメアという一種の宗教派閥なんだ」

「宗教派閥？ 集団じゃないんですか？」

「月の信仰集団の中でも、もっとも過激なのがその派閥なんだ。今までは細々とやっていたはずだけど、最近になって騒がしくなってきたね」

「過激… あ、兄様も言ってました。一部の過激派集団の思想が上の方にも蔓延し始めてるって」

「蔓延し始めてる、か。エスカレルニアは分からないけれど、フォージェルノートはほぼ全員そうだよ。恥ずかしながらね」

頭をかきながら、申し訳ないと言った顔で苦笑するシオン。

「いえ、決してそんな事は…」

「ま、恥ずかしいですむものではないわね。一国の王が信者となっているのだから」

「ははは。全く、あなたの言う通りだよ」

シオンの言葉を否定しようとしたリイナだったが、ユフィーにその言葉を遮られてしまう。そして、そのユフィーのきっぱりとした言葉を、シオンは乾いた笑みで受け止めた。

「…本当にね。…僕は、父上を止められなかったんだ。…本当、恥ずかしいよ」

沈んだ表情で俯き、小さな声で呟くシオン。だが、シオンが沈んでいるのは文字通り一瞬だった。

「…だー！ もう！ 今からでも止められるかもしれないっていつも言ってるでしょ！？ そのために旅をしているんだし！ いつまでもうだうだ悩むなー！！」

ドガッ

「ぐへっ！」

シオンの言動に急に立ち上がった、カナの怒り？のストレートがシオンの顔に突き刺さる。

どうでもいいが、今まで座っていたシオンを吹っ飛ばす程の力とは、カナも大概の常識はずれである。

「…カナ…。多分…ううん、絶対に素手でも魔物が殺せるよ…」

「いや、さすがにそれは無理があるかと思うんですが…」

その威力を見たクーは、カナに対して『絶対に怒らせたらダメな人』と言う認識を追加し、リイナはクーの言葉に静かに突っ込んでいた。

「カナ…。本気のストレートは止めてよ。痛いなんかじゃすまなくなるからさ」

「うるさい！ うじうじ言ってるシオンが悪いんだから！」

吹っ飛ばされたあと、殴られた頬を押さえながら戻ってくるシオン。殴った本人のカナはまだご立腹で、腕を組んでぷいっと顔を背けてしまう。

「…あなた達、痴話喧嘩するのは結構だけれど、話を続けてくれない？ あたしとしても、まだ聞きたい事があるのよ」

そんな二人を見かねたユフィーが、話の進行のために声をあげる。

その有無を言わさぬ雰囲気、声をあげようとしていたシオンは少し萎縮しながらも話を戻した。

「…ごほん。えーっと、どこまで話したっけ」

「ルナニスクルメアの話よ。ま、そうは言っても他に情報などろくに無いのでしょうか？」

「うん。確かにその通りだよ。でも、一つだけ確かなのは、近々必ず戦争が起こるよ。…フォーゲルノート帝国がエスカレルニア王国に宣戦布告する」

最後の言葉は、他の者達には聞こえないような小声で宣言するシオン。だが、最初の言葉だけでも他の者達には衝撃を与えていた。

「戦争、ね。そんな単語、生きているうちに聞けることがあるなんてね……」

シオンの言葉に、いろんな感情が入り乱れているユフイー。

「…兄様の予想した通りですね。さすが兄様です!」

リイナはここにはいない兄になぜか称賛を送る。

「うにゃー。ますますお店辞めといてよかったよう。こんなのじゃ絶対に売れないニャー」

クーは自分の選択が正しかったと、ほっと胸を撫で下ろす。

「全く…分かつてはいたけれど、かなり面倒な事に巻き込まれたわね…」

カナは予想していたよりも深刻な状況に、頭を抱えていた。

「とは言っても、いつ起こるかなんて分からないし、本当に起こると言う確証もない。この話は大半が僕の推測だよ」

「でも、実際にその集団はいて、その思想が広まっているんですよ? なら、それは正しいですよ。えーっと、シオン…さん? 様?」

肩を竦めるシオンだったが、その言葉にリイナは共感して声をあげる。だが、シオンの呼び名を決めかねたようで、肝心な所で躓いてしまう。

「あー、シオンでいいよ。さつきも言っただように、僕はこのファルカスと言っ名を捨てたようなものだからさ。様なんてもっての他だし、できれば呼び捨てで呼んでもらいたいかな」

「あ、そうですか。それなら私もリイナって呼んでください。ハーキュリーの名は、兄様が名乗るに相応しいものですから」

笑いあつて再度名前を名乗り会う二人。それに便乗してか、他の三人も再度名前を名乗りあつた。

その中で、ユフィーが普通に名乗って愛称まで紹介したことに、噂を聞いていたカナが驚きの声をあげたりしていた。

## 予兆（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 決意

「で、いきなり話は戻ると言うか変わるんだけどさ。他に話す事ってあったっけ？」

話していた内容が濃かったためだろう。二度目の自己紹介が終わった辺りで、シオンがそんなすっとんきょうな事を言い出す。

「…あなたの時魔法の事よ。…ま、他の子達はあまり関心がないみたいだけれど？」

そんなシオンの疑問を、ユフィーが呆れながらも返答するが、周りを見返してさらに呆れてしまう。

「ねえねえ、リィナの家ってあのでかいお屋敷よね？」

「そうですけど、そんなに大きいですか？ それに、私はあまり本家の方には行かないので…」

「あれは十・分・に・でかい！ 私みたいな一般人にとってはね！」

「そうだニヤ！ クーみたいな獣人族だったら、メイドさんみたいなじゃないと入れないのに！」

「え？ ええ？ ちょっと二人とも、落ち着いてくださいよー！」

そこには、二人の少女が上流階級の少女に向かって、一般人の不満をぶつけている所だった。

この三人、先程までのシオンの話はきれいさっぱり忘れていているようである。

「あー、確かにそうだね。それならユフィー、君だけにでも話そうか？ やっぱり、ここまで話したら全部話しておかないと」

「別にいいわよ。どうせいずれ垣間見る事になるでしょうから。あなたのその力をね」

「いずれ、ね。まあ、その通りになると思うよ。僕とカナがしようとしている事を聞いたら」

「しようとしている事？ …まさか、ルナニスクルメアによる二国間の戦争を潰そうと考えているの？」

先程までの話の流れから、そう推測したユフィーは驚きながら、だが口は面白そうに歪みながらシオンを見る。

「潰そうって言うのは言い過ぎだよ。…僕はただ、父上を止めたい。地位も何もかもを捨てて逃げたけど、でもやっぱり息子として……王子として父上の行為は見過ごせないんだ」

静かに自分の決意を語るシオン。その目は、しっかりと覚悟を持った覇気のこもった目だった。

「へえ……。 ( やっぱいい目をするわね……。色々と聞きたい事はあるけれど、リイナのためにもあたしのためにもついていった方が無難ね ) 」

シオンの目を見て、感心した声をあげるユフィー。



そして、自分の考えを纏めあげたユフィーは、自信を持ってこう言った。

「……いいわ。あなたのその目的にあたしも一枚噛ませてもらうわ。もちろん、戦争を止めるなんて大言壮語な事は言わないから」

「え？ いいの？ ユフィー」

「ええ。私たちはあなたが現れるまで旅の目的を決めていたようなものの。リイナの兄、レイソルから頼まれた事も、これで達成できるからね」

その発言に驚いて口をあんぐりと開けるシオンに、手をヒラヒラと振りながら、未だに話を続ける三人のもとへと向かうユフィー！。

「あ、ユフィーさん。どうかしたんですか？」

チャキツ

「「ひいつ！」「」

「…………ごほん。リイナ、あたし達はこの三人の旅に同行するわよ。そうした方が、あなたの『大好き』なお兄様の願いも叶うでしょう？」

近づいてくるユフィーに気づいたリイナが、未だに自らの私生活に踏み込んでくる二人を、剣を抜いて制する。その動きに、剣を向けられた二人は小さく悲鳴をあげて固まり、ユフィーは呆気にとられて無言になってしまった。

だが、すぐに咳払いをして気を取り直したユフィーは、嫌味と皮肉を込めた言葉をリイナに投げ掛ける。

「あ、そうなんですか。やっぱり兄様はすごいですね！　ここまで分かっていて、私に話を持ちかけたんですね！」

「…いや、それはあり得ないと思うのだけれど…」

自らの言った嫌味と皮肉が通じなかったばかりか、自慢とも取れるリイナの言葉に、静かに突っ込んでしまうユフィー。

「では、そうと決まったら即行動です！　行きましょう！」

おー、と言う風に手を掲げて宿屋から出ようとするリイナ。

だが、微妙に浮き立っているリイナの肩を、シオンが掴んで止める。

「ちょっとちょっとリイナ。行ってくてどこにさ」

「え？　帝国領に行かないんですか？　それに、帝国領に行けば兄様に会えますから！」

喜色満面。この言葉が一番似合う笑顔でシオンを促すリイナ。だが、シオンは苦笑するばかりで、その手を離そうとはしなかった。

「ごめんね、リイナ。私たちはそう簡単に帝国領には戻れないの」

剣を向けられていた地獄から復活したカナが、申し訳なさそうにリイナに話す。

「え？　どういう事ですか？」

「話にはあつたけど、シオンは拐われた帝国の王子。そして私は、その王子を拐った誘拐犯なの」

頭を抱えながらやれやれと言った風に話すカナ。だが、リィナは良くわからないと言った風に首をかしげている。

「…あなた達、帝国では指名手配されているの？」

「二人はお尋ね者だったのかニヤ！？」

二人の考えに気づいたユフィーとクーが同時に声をあげ、クーにいたっては身を乗り出している。

「…クー。お尋ね者って言うのはあんまりだよ…。あながち間違つて無いから困るんだけどさ…」

「…うん。ユフィーちゃんが言うような感じだったらまだ良かったんだけどね…」

クーにお尋ね者と呼ばれた二人が落胆して肩を落とす。

軽く悲壮感が漂う二人に、その言葉を言ったクーは慌てながら弁解する。

「うにゃあ！　ごめんなさいニヤー！　許してニヤー！」

「…ま、許すし怒ってないけどさ。ユフィーの想像通りだよ。最近

についてはあまり知らないけど、最初はそういった指名手配はされ  
たたよ？ もちろん、秘密裏にだけだね。でも、雇われた賞金稼ぎ  
みたいな人とか、帝国騎士団の中でも僕の周りにいた人達とか、い  
ろんな人達が来たね」

「確かに来たわね。やたら強かったりして大変だったわ。特にあの  
剣を二本使う女、しつこすぎよ」

追われていた時期の事を思い出して悪態をつくカナ。

その時の事は、シオンもあまり思い出したくないようで、二人そろ  
って目を伏せていた。

「へえ…なるほどです。だから二人は帝国領には足を踏み入れたく  
ないんですね？」

「うん。前にも頑張って入ってみたんだけど、僕の元護衛をやつて  
た騎士の人に見つかってね…」

「ちょっと！ あれは見つかったなんてものじゃないでしょ！ い  
きなり元護衛対象、しかも王子に矢を射かけるなんてただの馬鹿よ  
！？」

一番嫌な話だったのだろう。シオンに掴みかかるつかと言う勢いで  
捲くし立てるカナ。だが、そのカナをシオンは柔らかに退け、話を  
続ける。

「まあそう言う訳で、僕は帝国領にすぐに向かうことは出来ない。  
ここエスカレルニアにはリイナがいるからいいとして、それ以外だ  
と僕らには待つと言う選択肢しか……」

ドゴーーーーン！！！

「！　なんだ？」

「爆発よ！　しかも魔法によるものだわ！」

シオンの言葉を遮り、爆音が酒場を支配する。そして、それに伴った振動も。

それにシオンは困惑の声を上げ、ユフィーは爆発の空気に乗って流れてきたものに魔力が混じっていた事を伝える。それはつまり

「まさか、もう攻めてきたって事は無いですよね……？」

リイナがありえないと言ったような言葉を出し、体を震わせている。

それはシオンも同じだった。自分の知る帝国に使える者達の性格上、こうまで話が進むとは思ってはいなかったのだ。それに、クルトは『時の証』をまだ手に入れていない。いまだに送られてくる刺客がそれを物語っているのだ。

だが、シオンは失念していた。父はやると言ったら絶対にやる。そんな男だと言うことに。

「……くそ！　ごめん、皆！　ちょっと外を見てくる！」

「シオン！　待ちなさい！　ああ、もう！　あたし達も行くわよ！　クー、怯えてないで立ちなさい！」

その事に気づいたシオンは、急いで外の惨状を確かめに飛び出していく。自分の考える事が起きていない事を祈りながら。

そして、シオンを呆然と見送った四人だったが、いち早く気を取り直したユフィーが三人を引き連れて酒場から飛び出した。

## 決意（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 発端 戦争の始まり

ドゴーーーーン!!!!

盛大な火柱が、クルメニアの街に上がる。

爆発系の炎の魔法によって上がった火柱は、街を焼き、人を焼いていく。そんな悲惨な光景を、二人の青年が眺めていた。

一人はまだ若く、幼い印象を受ける真紅の髪を腰まで伸ばし、背に弓を背負う長身痩躯の青年。もう一人は、唇を卑劣に歪ませて焼かれていく街を眺める、短い緑の髪を逆立てた青年。

その二人の青年は、お互い同じ服を着て後ろに控える兵隊らしき人の波に指示を出していた。

「やーやーやー。皆元気にやってるかなー？ 今日初めての人殺しだろうけど、楽しくやっていこーねー」

「…ピラー殿。兵の指揮を下げるようなことは言わないでいただきたいのですが」

陽気に物騒な事を言い放つ緑髪の青年を、真紅の髪を持った青年がいさめるように呆れながら言う。

だが、ピラーと呼ばれた青年はその陽気な雰囲気を一瞬で捨て去ってこう言った。

「ああ！？ 俺の方が偉えんだから、口を挿まねえでいただけると



嬉しいんですがねえ！ ええ！？ サーヴィー君！？」

「（…また出たか）…申し訳ありません。ピラー参謀」

一気にガラが悪くなり、お世辞にも好意的とはいえない雰囲気に変わるピラー。顔もそれに合わせてか、かなり歪んでいた。

サーヴィーと呼ばれた青年は、真紅の髪を翻しながら頭をたれる。その心では悪態を吐きながら。

「うんうん、君はそれで良いんだよ。疑う必要なんかないよ？ 君達はこの僕の駒なんだからさー」

「（…この腐った下種が）…ピラー参謀、陛下よりの御達しの通り全て焼いてしまわれるのですか？」

「うん、当たり前だよ。この平和を偽りだと気づかせてあげるには壊すしかない。いやー、壊すって楽しいよねー」

再び陽気な雰囲気をもったピラーが、指をパチンと鳴らしながらサーヴィーの言葉を肯定する。

「煉獄の炎よ。その身に秘めたる力を爆発させよ！ 『煉獄の炸裂』」

バーニング・バースト

！」

ドガーーン！！

ピラーから発せられた魔法は、地面から盛大な火柱を吹き上げさせる。石畳を焼き、それに巻き込まれた者は一瞬にして灰になってその命を終わらせる。

その様を、ピラーは嘲笑をあげながら狂ったように眺めていた。

「ハハハハハハ！！！！ 最高だ！ 実に最高じゃないか！！」

「……ピラー参謀。私は当初の予定通り東地区に向かいます」

「あ？ ああ、いつてらっしゃーい」

「ハッ」

手を胸に置き、頭を垂れてその場から離れるサーヴィー。すると、一人の兵士がサーヴィーに話しかける。

「よいのですか？ 前線から離れてしまっても……」

「構わないさ。それに、あの男は私は好かん」

兵士と言葉を交わしながらピラーの元から離れていくサーヴィー。その間もピラーの起こす爆発の音は鳴り止まなかった。

「よし！ 十人ほど私について来い！ 陛下のため、奮戦せよ！」

「オオオオオオ！！！！！！」

「（……シオン殿下。あなたは今どこで何をしているんですか……）」  
威勢よく指示を出すサーヴィーだったが、その心は全く別の所に向いていた。

「…これは…」

「！ ひどい…！」

「炎系の魔法ね…。術者はそんなに強くないわね。爆発の規模が小さすぎるわ」

「…なんでこんな事ができるんですか…！」

「うー、鼻が痛いのニャー…」

宿屋から飛び出した五人は、目の前に広がる街の変わり果てた姿にうな垂れていた。

シオンとカナは壊されていく街に息を呑み、ユフィーはすぐさま使われた魔法についての分析を始める。リィナは壊れた瓦礫の中に見

つけた焼死体に、唇を噛み締める。クーは唯一の獣人族であるため、利きすぎる鼻を押さえてうずくまっていた。

「くそ！ こんな事が出来るのは、僕は一人しか知らない。…ブレイク・ピラー。帝国の作戦参謀だ」

瓦礫を殴り、やり場の無い怒りをぶつけるシオン。

その行為を止める者は誰もいなかった。だれもがその気持ちだったからだ。

「作戦参謀？ そんな大物がここに来ているの？」

シオンが呟いた単語に引つ掛かりを覚えたユフィーが質問を投げかける。黒い笑みを浮かべながらだが。

「うん、多分そうだと思うよ。二重人格みたいな人でね、戦闘になったりちよつと頭にくるとすぐガラが悪くなるんだ。

まあ、普段も物騒な事しか言わない人だったけど」

「そう。それならあたしに任せなさい。幸い火の魔導師のようだし、それならあたしが向かった方が良いわ」

「…それもそうだね。なら、ピラーについては任せるよ。多分、千人規模で兵がいるかもしれないけど」

「ふふふ、最高じゃない。今からぞくぞくしてきたわ」

「武運を祈ってるよ。じゃあ、ここが集合場所という事で」

「分かったわ。それじゃあね、シオン。あなたにも武運を祈ってるわ」

不敵な笑みを崩さぬまま、シオンたちと一時の別れを告げて踵を返すユフィー！。

去っていくユフィーの背中を見ながら、シオンたちは自分のなすべき事のために動きだす。

「…僕らが出来ることなんかたかが知れてるけど、でも、やるべきことはやろう」

「なら、私は王宮に行ってきます。あそこなら兄様とも連絡が取れると思いますし、やっぱり、王国騎士団がどうなってるのか気になるんです」

リイナが手を上げ、自らの意見を主張する。兄は騎士団会議で出払っているが、少しでも面識のある自分が行けば話しも楽だと判断したのだ。

「分かった、それなら任せるよ。クーもついていてくれるかな？  
少しでも人が多い方が安全だと思うんだ」

「分かったよ。じゃあ、リイナ行くのニヤ」

「はい。では、御武運を」

なぜかクー主導で去っていく二人を見つめながら、残されたシオンとカナはこれからについて話し合う。

「さて、僕らだけ残った訳だけど、さすがにこの状況じゃ住人の避難を手伝うのは無理そうだね」

「ええ。でも、かと言って何もしない訳には…！ シオン！ 下がって！」

「え？」

ドスッ

二人の話を遮るように、一本の矢が二人の間に突き刺さる。その矢は綺麗に瓦礫に突き刺さっており、瓦礫にひびを入れてもいない事からかなりの技量の持ち主である事が伺える。

「ちっ、外したか。…お前達は二手に分かれて住人の搜索を始めろ。いいか、間違っても殺すな」

「ですが、それでは命令に…」

「くどいぞ！ 今はあのような男のことなど忘れる！」

「ハッ！」

その矢を放ったであろう人物が、連れて来た兵と思わしき集団に指示を飛ばす。苛立ちが募っているのか、兵達の疑問にも怒気のこもった声で返している。

だが、シオンはその声に懐かしさを覚え、同時に困惑していた。

「…あの声、まさか…」

「ええ。シオンの思っている通りで間違いないと思うわよ。なんでこんな所にあいつが…！」

カナもその声の主に気づいたのだろう。悪態を吐きながら前回苦汁を飲まされたことを思い出しているのか、悔しそうな顔をしている。

「その者達！ 隠れていないで出てきたらどうだ！」

「！ 隠れなきゃいけない状況を作ったのは誰のせいよ！」

「あ、カナ！」

発せられた言葉に憤慨したカナが瓦礫から飛び出していく。シオンはそのカナを見送るだけで、まだ外に出られなかった。

目の前の現実を信じたくないがために。

「…貴殿は、カナ・コルセルニアか？ っ！ なら、ここには！」

「うるさい！ あんたには色々とムカついてるんだから、一回黙れ！」

レストーシオンを構え、真紅の髪を携えた男に突進していくカナ。その男は、カナの名を呼んだ後すぐに自らの考えに至り驚愕の表情を浮かべながらカナの神速の突きを避ける。

「くっ！ 殿下が…シオン殿下がいらっしゃると言うのか…!?」

「ええい！　一回黙れって、言ってるでしょ！」

完全に意識がカナから外れている男に、カナは一気に槍を振り回す。遠心力を利用して爆発的に加速度をつけた穂先は、上段から男を襲う。

「くそっ！　ならば私が戦う理由は！」

「あんたには無くても、私にはあるのよ！」

カナの一撃を辛うじて避けた男は、後退しながら矢を放つ。その矢の本数は、六。並の人間が一息に放てる矢の量では無い。

だが、その矢の雨をカナは矢を一振りして全て弾き落とす。槍のリーチがなせる技に、男は舌打ちをしながらさらに矢を放つ。

その数はさらに増えるが、カナも槍を円状に回転させて一切の矢を後ろへと通さない。

「ちっ。やはり分が悪いか……」

「……だー！　こんな弾幕、私には抜けられないわよ！　せめて一瞬でもいいから途切れてくれないかな……」

「だが……！」

男が弾幕を張るのをやめ、一本の矢に力を籠め始める。その隙を見逃さないカナではなく、槍の回転はそのままに男へと突進していく。だが、その二人の攻撃が放たれる事は無かった。



二人の間の地面が黒く変質して、ゆつくりと削り取られていく。元地面であった真つ黒な物体は、小さな球体となって周りのものを巻き込んで消滅する。

「これは…！」

「ちょっとシオン！ 邪魔しないでよ！」

「邪魔ぐらいするさ。…もう止めてくれ、二人とも」

「シオン殿下！ なぜあなた様がこのような所に…？」

二人の間の地面を文字通り消し去った技を見て、男はまさかという顔をし、カナは邪魔が入ったと怒っている。

だが、その技『<sup>ブラック・ワーム</sup>黒球闇』を放った本人であるシオンは、悲しそうな顔をしながら瓦礫の中から現れた。

シオンが現れた事により、男は驚愕の表情を浮かべて声を上げる。その男の言葉に、シオンはさらに悲しそうな表情を濃くしながら言う。

「それは僕の台詞だよ！ トラヴァス、なぜ君がこんな所にいる。帝国騎士団である君が！」

「…帝国騎士だからです。我らは王の手足であり唯一の剣。王の命令は絶対です」

「そんな！ 父上がそんな事…！」

「これは本当です。∴フォーゲルノート帝国は、エスカレルニア王国に宣戦布告します」

信じられないと言った顔をするシオンに対し、トラヴァース・サーヴィーは静かに、しかしきっぱりと語る。

二つの大陸を巻き込む戦争の、始まりの宣言を。

## 発端 戦争の始まり（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## ユフィーの怒り

「さて、と。あたしに任せると言っ出てきたのはいいけれど、場所の特定が難しいわね…」

四人と別れたユフィーは荒れた街を歩いていた。

所々陥没し、燃えている石畳を確認しながら慎重に歩いていく。その際に、微力ながら残る魔力を探りながら、相手の技量を図っていた。

「…ふーん。シオンの言った事は本当のようね。ただの雑魚ではなさそうだわ」

その魔力に残る僅かばかりの術者の思念に、ユフィーは素直に感心する。

普通、魔法は術者の魔力と精神力によって発動する。それはつまり、どんなに強力な魔力を持っても、それに見合う精神がないと魔法は発動しないのだ。その逆もまた然りで、精神力が強く出た時、つまりは死などに直面した時は強力な魔法が発動するとも言われている。

その事から、ユフィーはこの術を発動したと思われるブレイク・ピラーと言う男に、内心舌を巻いていたのだ。

「ま、とは言ってもそこまで苦戦するような相手には……いたわね」  
そう言ったユフィーの前には、数百人ほどの兵を連れた緑の逆立つ

た髪の男が、兵に指示を飛ばしながら自らの炎魔法で街を焼き払っていた。

「さー、みなさん！ 陛下のため、そして自分たちのために頑張つて戦ってくださいよ！？」

「オオオオオー！！！！」

「（…何よあれ？ 馬鹿なの？ 腐っているとしか言いようが無いわね）」

かなり辛辣な言葉を、胸の内だがはき捨てるように言うユフィー。

だが、男達はユフィーの事に気づく事無く破壊を続ける。その中に時折現れる住人の叫び声は、兵達の声や魔法の衝撃によってかき消されてしまう。

その同じ人間とは思えないただの殺戮に、ユフィーは静かに切れていた。そして、その怒りのままに体の魔力を彼女の愛用の長杖『スターレイン』へと流し込んでいく。

「さあ！ そろそろここも大詰めです！ 早く壊して次に行きま…ん？」

意気揚々と次の魔法を発動し、新たな殺戮を求めて指示を出そうとしていた男はようやく気づく。

自らの魔法により燃えていた街が、自分では無い他人の魔力により凍っていく事に。

「……ふふふ……。こんなに怒ってるのは何時以来かしらね……」

真つ黒な笑みを浮かべながら、ゆっくりと一歩ずつ地面を踏みしめるように歩くユフィー。

その踏みしめられる地面は、ユフィーの魔力によって少しずつ侵食されるように凍っていく。

「な、何者だ、貴様！」

戦慄さえ覚えるユフィーの雰囲気、ブレイクは体を震わせながらも辛うじて言葉を搾り出す。

だが、ブレイクの震える言葉などユフィーの耳には入らず、ただその距離を縮めていく。

「ええい！ 闇夜に灯る、蝶の揺らめきよ。我が前の敵を焼き尽くせ！ 『灯火の蝶』！」  
フレライト・バタフライ

眼前に迫る脅威を排除しようと、内に染まる恐怖という感情のままに魔法を発動するブレイク。その魔法は、巨大な一匹の炎の蝶となり、ユフィーへとその死の羽を伸ばす。

ユフィーは自らを焼かんとする蝶の炎の羽を、ただまっすぐに見つめて自らも魔法を発動する。

「凍てつく世界に住まう、唯一の絶対者。氷の女王よ、我が呼びかけに答え、その冷たき体で我が脅威を抱け。『氷の抱擁』」  
インプレス・フリーズ

ユフィーが炎の蝶に向かって構えたスターレインの宝玉部分が、一

際眩い光を放つ。そして、その光とユフィーの呪文に呼応する様に魔法が発動する。

その魔法から生まれたものは、巨大な吹雪。ユフィーの怒りを表すかのように吹雪は荒れ狂い、炎の蝶を包み込んでいく。

猛威を振るう吹雪が収まった後には炎の蝶は跡形もなくなっており、その後には氷の銀世界が生まれていた。

「な、何だと…！ ……てんめえ、よくもやってくれたなあ…！」

目の前に広がる銀世界に、ブレイクは一度信じられないといった顔をするが、その次の瞬間にはガラスの悪い声を上げてユフィーを睨んでいた。

「聞いた通りの性格ね。でも、二重人格みたいな人じゃなくて、もうそのまんまでいいじゃない」

「聞いた通りだあ？ ……んなもん誰に聞いたあ！」

シオンからの情報通りの反応をしたブレイクに、ユフィーは半ば呆れて肩をすくめる。だが、その行動が癪に障ったらしく、怒りをあらわに体に魔力をまとわせるブレイク。

ブレイクがまとった魔力を見て、ユフィーは余裕の笑みを浮かべて鼻を鳴らしながら手招きする。

「ふん。あんたが知る必要は無いわ。いいからかかって来なさい、軽く捻ってあげるから」

「言わせておけばあー!!」

ユフィーの挑発に乗ったブレイクは、拳を固く握り締めて突進して行く。握り締めた手を高く振り上げ、突進の威力そのままにユフィーに向かって振り下ろす。

体格差は歴然。普通に考えれば、ユフィーがブレイクに勝てるわけが無い。だが、ユフィーは余裕の笑みを崩さずに迫ってくるブレイクを見つめていた。

「さあ…あなたの出番よ。契約の名の下に具現せよ。我が前に立つ敵を打ち払え。その体に秘めし、極寒の吹雪の冷たさを持つて!」

ユフィーの口から発せられたのは召喚呪文。召喚魔導師であるユフィーの真骨頂の技であり、一番の魔力を使う技だ。

右手の中指にはめられた指輪『デイザイア』が輝き、小さい吹雪がその指輪を中心に巻き起こる。そして、その中心に巻き起こる吹雪から、一匹の魔物が現れた。

「『スノーハルピユイア』だとお!? てめえ、召喚魔導師か!」

ユフィーが召喚した魔物を見て、ブレイクが驚きの声を上げる。

ユフィーが召喚した魔物は、一般的にスノーハルピユイアと呼ばれる人鳥型の魔物だ。操る属性によって冠する名前が変わり、この魔物はスノーの名の通り氷を操る魔物である。

召喚されたスノーハルピユイアは、一度大きく背伸びをするように体を伸ばすと、召喚者であるユフィーに向き直って体の半分程を占



める翼を折りたたんで礼をする。

「…さて、今からあなたにしてもらう事は、人を殺して食らう事よ。出来るわね？」

まるで自らの子供に語りかけているような声音で命令するユフィー。言葉の内容としては中々に物騒なものであったが、その命令にスノーハルピュイアはコクリと頷き、ブレイクへと向き直った。

「はっ！　いくら魔物が相手だろうが、俺の炎で焼き尽くしてやらあ！」

翼を広げて威嚇するように飛び上がる敵を見て、ブレイクは魔力を練り上げていく。だが、その魔力が魔法に変わって発動する事は無かった。

「誰があの子だけに戦わせると言ったの？　あんたは今この段階で二対一なのよ」

「は？」

ピキピキピキ…

「んなあ！　お、俺の腕があ！　あ、足もお！！」

練り上げた魔力の上から覆いかぶさるように、ブレイクの右腕と左足が凍っていく。多大な炎の魔力で熱を持つ自らの体が凍っていく事に、ブレイクは恐怖のあまり叫んでいた。

「ど、どう言う事だ！？　なんで俺の腕が凍ってるんだよお！」

「さあ？ あんたは知らなくてもいい事よ。いえ、一生かかっても分らない事でしょうね」

「く、くそがあ！ おい、お前ら！ こいつを始末しろ！」

ゆっくりとだが着実に凍っていく自らの体を見て発狂しかけるブレイクに、ユフィーは冷たく言葉を言い放つ。だが、逆にその言葉で冷静になれたのか、ブレイクは情けなくではあるが周りの兵達に助けを求めるように指示を飛ばす。

しかし、その指示が兵達に届くことは二度と無かった。

グサツ

「無駄よ。だって、今最後の一人が死んだから」

ブレイクが見たのは、部下であった兵の胸にスノーハルピユアの足の鉤爪が刺さった瞬間だった。そして、スノーハルピユアはそのまま胸から心臓を抉り出してそれを喰らう。

その様を見たブレイクは、他の者は本当にいないのかと辺りを見渡す。ユフィーの静かに諭す言葉も耳に入らず、銀世界にアクセントとして残る部下の血痕を見つめていた。

「…ハハハハハ！ 面白え！ 面白えじゃねえかあ！」

その惨状を見とめ、顔を上げて焦点の合っていない瞳を彷徨わせて、狂ったように笑い出すブレイク。

それをいぶかしんだユフィーが眉を顰めてブレイクを見つめていると、ブレイクから十発ほどの炎弾が飛んで来る。咄嗟に魔法障壁を張って防御すると、煙の晴れた先にはブレイクが体を揺らしながら立っていた。

「…ちっ…まあいいわ。じっくりあたしが料理してあげようと思ってたけど、どうやらあなたがご指名のようよ。ハル」

体をユラユラと揺らしながら立つブレイクの目は、スノーハルピユアへと向けられていた。部下の命を奪った、憎悪の対象に。

その視線に気づいたユフィーは少々残念そうにしながらも、ハルと言う愛称で呼んだスノーハルピユアに命令を下す。

「…喰らいなさい。骨の一片たりとも残さずに」

ユフィーの命令を受けたハルは、ブレイクに向かって飛び立っていく。べつとりと血がついた爪を振りかぶり、ブレイクに向かってその鉤爪を振り下ろす。

その振り下ろされる死をはらんだ鉤爪を、凍り行く体を使って防ぐブレイク。だが、凍りきった体では鉤爪を受け止めることなど出来はしない。無残にも砕け散る自らの腕を見て、ブレイクはその狂喜の表情を深めていく。

「ハハハハ！ もっと、もっとだ！ どうせお前達は知る事になるのだ！ 世界の終わりを！ 真世界へと至る扉の開門を！」

凍りきっていない肩口や首、至る所をハルに蹂躪されながら笑うブレイク。その張り付いた笑みのまま、高々に宣言していく。

グシャッ

だが、その宣言はハルの鉤爪によってかき消された。なぜなら、頭をぐしゃりと潰され首無しとなった瞬間、その体が完全に凍りきって奇妙な氷の像となったからだ。

爪についた血を舐め取っているハルの隣に立ったユフィーは、その奇妙な像に触れて一言。

「…爆ぜよ」

そのたった一言で、氷の像は呆気なく弾ける。キラキラと舞う氷の欠片に包まれるユフィーの姿は美しく、それでいておぞましかった。

## ユフイーの怒り（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 合流へ

「はぁ、はぁ、はぁ。クーさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫ニヤ。それより、リイナこそ大丈夫？　かなり息が上がってるけど…」

「うー、こんなに遠いとは思ってなかったんですう」

シオン達と別れた場所ほどは壊れていない街を、リイナとクーが走る。二人が向かっているのは城。この街の惨状の報告、あるいは確認するためだ。

そこにリイナとクーが向かっているのだが、やはり鍛えていると言っても獣人族の方が基礎体力は上である。先ほどから大分息があがってしまっているリイナに対し、クーはさほど堪えていないようにリイナに併走しながら心配そうに声をかけていた。

そのクーの心配する声に、リイナは半ば泣きそうな声で走りながら答えていた。

「そう言えばリイナ、城に行っても当てなんかあるの？」

「はぁ…。はい。一応、前に兄様について行った時に好くしてもらった首都の近衛隊の方がいるはずです。近衛隊は騎士団と違って首都から動く事はまず絶対に無いですから」

クーの質問に答えるために、一度息を整えてからその答えを一気に喋るリイナ。

首都に住んでいたクーにとって、近衛隊の存在というものは大きかった。なぜなら、近衛隊というものはどこにでもいるような治安維持のために作られた集団で、元商人であったクーは何度かお世話になっているのである。

「ねえ、リイナ。もしかして、その好くしてもらった人って狐耳の獣人族の人…なのかニヤ？」

「え？　そうですけど…。クーさん、良く分かりましたね」

「うん。近衛隊の人だったら、よく覚えてるよ。……ジュルリ……」

クーの口から発せられた意外な発言に、リイナは驚いた顔をして反応する。だが、クーはその理由をつけてその言葉に平然と答える。

しかし、そこまで言った後クーはリイナに見えないように、盛大に溢れた涎を拭き取っていた。その行為を、リイナは走ることに集中していた為に見る事は無かった。

「あ、クーさん。見えてきましたよ！」

「…やっぱり、いつ見てもおつきいニヤ」

リイナが指差したのは、クルメニアの中心に建つエスカレルニア城。質素と豪華さが混ざりあったなんとも不思議な形の城である。

その城を見上げながらクーはため息をついていた。まさか、こんな形で城に入ることなど全く予想していなかったからである。

「取り合えず、城の中に入りましょう。そこで色々話を聞けるはずです」

「分かったニヤ。…？ リイナ、門の前に人が集まってるんだけど…」

「え？ あ、あれは近衛隊の方々ですね。でも、何であんな所に…」  
一旦は了承したクーが見つけたのは、城に入る門の前で集まっている集団だった。

その集団は、皆一様に同じような服装をしており、腰についた剣も背におう槍も同じような装飾で纏められていた。

「…ん？ リイナ様！ ご無事でしたか！」

「あ、ナリアさん！ そちらこそご無事で何よりです！」

その集団に混ざっていた一人の女性が、リイナ達に気づいて駆け寄ってくる。

落ち着いた雰囲気のある女性で、ユラユラと動く尻尾と頭にある狐の耳が獣人族であることを証明している。

リイナは駆け寄ってくる女性の姿を見つけると、元気よく手を振りながらその女性を迎えた。

「ええ。あなたの兄君からお話は伺ってありました。妹が旅に出るだろうから、何かあればよろしくと。…まさか、こんな形でお会いするとは夢にも思いませんでした…」



「兄様がそんな事を…。あ、ナリアさん。首都の状況はどうなっているか教えてもらえますか？あと、できれば兄様と連絡が取れればいいのですが…」

ナリアと呼ばれた狐耳の獣人族の女性は、リイナの言葉に悔しそうに首を振る。

その仕草を見て、リイナとクーは最悪の事態を予想して目を伏せてしまった。

「…首都クルメニアはほぼ半壊状態です。街の東部分が特に被害が多く、死傷者もこちらでは正確に把握していません。それに加え、連絡用の魔法水晶も内部の者によって破壊され、騎士団と連絡がとれずじまいです」

「そんな…！あ、王は？シリアナ王は無事なんですか？」

少しでもいい報告を期待していただけに、その報告の悲惨さにリイナは軽く悲鳴をあげてしまう。

だが、直ぐに気を取り直して次の質問を投げ掛ける。

「我らが王は無事です。宣戦布告をした裏切りの側近に命を狙われましたが、流石は武王と呼ばれるお方です。返り討ちにしたと笑っておられましたよ」

「そうですか…」

「ちょっと待って。宣戦布告をした裏切りの側近って、どう言う事

「ニヤ？」

曖昧な関係ではあったが、使えていた主が無事だと言うことを知ると、リイナは胸を撫で下ろした。

だが、その隣で話を聞いていたクーは話を遮るように疑問をぶつける。

「言葉通りの意味になります。まず、我がエスカレルニア王国はフォーゲルノート帝国と戦争状態になりました」

「やっぱり、シオンさんが言った事は正しかったんだ」

「そうなるニヤ。でも、言葉通りの意味と言うことは、フォーゲルノートの息がかかっていた者がいたと言うことになるけど…」

シオンの言葉を思いだし、その言葉の真意を噛み締めるリイナとクー。

その中であつた言葉から、一つの予想に至つたクーは独り言のように呟いていく。

「いえ、少しそれは違います。王の話によると、返り討ちにした側近が言った言葉の中に、ルナニスクルメアと言う月の信仰集団の名前が出てきたと仰っていましたから」

クーの独り言を否定するように言葉を口にしたナリアだったが、リイナとクーは逆に顔をひきつらせた。

「ルナニスクルメア…。エスカレルニアにも本当にいたんですね…」

「でも、宣戦布告をしたって事は、フォーゲルノートと戦う事になるんでしょ？」

「はい、その通りです。王もそのつもりだと、我ら近衛隊や騎士団に命じておりました。ええと……」

「……？ あ、クーでいいニヤ」

ナリアが急に言い淀んだことをいぶかしんだクーだったが、紹介をしていないことに気づいて自分の名前を名乗る。

その名前を受け取ったナリアは、佇まいをきちんと直して敬礼する。

「私は、クルメニア近衛隊所属のナリアと言います。以後、お見知りおきを」

「わかったニヤ」

「なら、ナリアさん。私達にも手伝えることってないですか？」

今まで顔を伏せていたリイナが、ナリアにそんな事を提案する。その思わぬ提案に、ナリアは驚きながらも喜びの声をあげる。

「よいのですか？ 態々リイナ様のお手を煩わせても……」

「構わないですよ。……今こうやって話している時にも、被害は増えているんです。それに、困っている人を見捨てるなんて、兄様に怒られてしまいます！」

小さく拳を握りながら、熱弁を振るうリイナ。

そんなリイナの様子に、申し訳なさそうに下を向いていたナリアは、少し呆れたようにため息をついた。

「ふつ。やはりリイナ様は兄君を深く敬愛していらつしやる。…分かりました。今隊長に取り次ぎますので、少々お待ちください」

そう言い残すと、未だ門の前に集まっていた近衛隊の仲間の下へ駆けっていくナリア。

駆けていくナリアの背を見つめながら、クーは未だに拳を握り締めているリイナに向かって言葉を紡ぐ。

「リイナって、本当にお兄さんが好きなんだねー」

「はい！　だって、越えたい壁、憧れの存在ですから！」

「ふーん。そんな自慢のお兄さんだったら一度会ってみたいニャー」

一度は呆れていたクーだったが、口もとに手を当てながらまだ見ぬリイナの兄の人物像を思い浮かべる。そのクーに質問されたリイナは未だに拳を握ってその兄の事を思い浮かべていた。

## 合流へ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 一時の敗北

「…いいですわねえ、平和そうで…」

エスカレルニア城の尖塔の突端に、一人の女性が薄く笑いながら佇む。口元は笑っているが、冷やかな目でその眼下ににいる人間、リイナやクー、近衛隊の面々を見下ろしていた。

年はナリアと同じかそれより少し上くらいであろうか。銀縁の大きな眼鏡が印象的な、独特の青みがかった衣装に身を包んだ女性である。

その女性が紡いだ言葉は、普通では絶対に出てこないような言葉である。だれがこの燃え盛る街を見て平和などと言えるのだろうか。

「…だからこそ、氣にくわないのですわ」

そう口にしながら、女性は両手を自らの眼前へと持ち上げていく。そして、その両手の先に魔力を込めていく。

込められた魔力は、女性の両手で巨大な水の渦となつてうねる。水の竜巻と言つてもいいほどの圧力を、女性は冷やかな目で見つめながら、両手をゆっくりと下ろしていく。

ナリアが向かう、近衛隊の集まる円の中心に向かって。

「永久に流るる水の調よ、我が前に見える脅威を、その清らかな身で洗い流せ。『水の奔流』ベイス・トルナード」

唱えられた呪文と共に、両手にあつた水の竜巻が眼下に向かって落下を始める。その竜巻は、膨大な質量を保ったまま猛然と突き進んでいく。

そして、眼下にいた近衛隊の面々を巻き込んで地面へと衝突した。

ズガーン!!

「キャアッ!」

「っ! ナリアさん!」

近衛隊の下へと向かつていたナリアは、目の前で起こった水の竜巻の地面への衝突の衝撃をともに受け、体を吹き飛ばされてしまう。爆風によって吹き飛ばされる様を見たリイナとクーは、ゴロゴロと人形のように転がったナリアの下へ駆け寄る。

「しっかりするニャ!」

「かはっ! い、いったい何が……っ!」

駆け寄ったクーが、ナリアに声をかけながらその体を支える。その隣にきたリイナは、ナリアを支えるようにその手を差し出す。

クーやリイナに手伝ってもらいながらだが、痛めた体に鞭打って起き上がったナリアは、眼前に広がる惨状に息を呑む。

三人の目に広がるのは、圧倒的な水の質量に成す術もなく破壊され

た石畳と、近衛隊の骸達。未だに水雫が滴るその体は、様々な角度に折れ曲がっており、誰もが見る目を逸らす光景だった。

「そ、そんな…！ 隊の皆が…！？」

「ナリア！ しっかりするニヤ！」

「…なんで、こんな事…。っ！ 皆さん、上です！」

その光景を目の当たりにしたナリアは、顔に手を当てて蹲ってしまった。リイナとクーもその惨状を目の当たりにしたせいか、悔しそうな顔をして唇を噛み締めていた。

だが、リイナは頭上で輝いた光を見逃さなかった。そして、その光の方角を指差して声を上げる。

スタッ

その光の方から、一人の女性が飛び降りてくる。リイナが指差したのはかなり上の方なのだが、そんな事を感じさせない軽々とした着地で地面へと降り立った。

「お初にお目にかかりますわ。私の名前は、ソリアナ・レッドフィールド。フォーゲルノート帝国の国王親衛隊をやっておりますの」

仰々しく礼をしながら自らの名前と役職を口にする蒼銀の髪を持った女性。銀縁の大きな眼鏡に手を当てながら、リイナ達を威圧するように立っている。

その威圧感に気圧されていたリイナ達だったが、大きく息を吸い込



んでから意識を保つように言い返す。

「…そうですか。でも、あなたの名前なんてどうでもいいんです。  
…この惨状を　　いえ、あの魔法を使ったのは、あなたですか？」

「そうですわ！　私の水魔法なら、あのような下賤な輩など一撃ですわ！」

「……不意打ちだったくせにニヤ…」

リイナの質問に胸を張って答えるソリアナ。動きに合わせて揺れる髪が光を反射し、なんとも言えない雰囲気醸し出していたが、リイナ達にとってはどうでもいい事だった。

その証拠に、クーはぼそりと誰にも聞こえないような小声で憎まれ口を叩いていた。

「まあ？　あなた達は少しはお強いようですので、心優しい私が生かして差し上げたのですわ」

顔の前で手を翻すようにひらひらとさせながら、挑発するように言うソリアナ。

安っぽい挑発なのだが、今のナリアにその言葉は充分に癪に障るものだった。

チャキツ

「…生かしておいた？　どっという意味よ？」

剣を抜き、まっすぐソリアナに剣先を向けるナリア。近衛隊として訓練を重ねる彼女にとっては、剣をまっすぐ構えることなど造作も無い事なのだが、今の心境を表すかのようにその剣先を小刻みに揺れていた。

「ふん、言葉通りの意味ですわ。でも、あなたと隣にいる獣人が組んでも、あの銀の髪の娘には勝てないでしょうけど」

向けられる剣先にも動じず、ソリアナは嘲笑うかのように三人を順番に指差していく。そして、その指先はリイナに向けられたまま止まる。

その向けられる指ごと睨みつけるように、リイナはソリアナを見つめていた。

「…私はそんな自分が強いなんて思った事は無いですよ。だから、そんな言い方は心外です」

「そうニヤ！ 大体、なんでリイナがクーたちより強いって分かるのニヤ？」

少し論点がずれている気がするが、クーが威勢よくソリアナの言葉に噛み付く。それに合わせて、二人はナリアに習うように自らの得物をソリアナへと向けた。

リイナは片刃の独特の形をした『セントクルセイダーズ』を上段に構え、クーは自らの拳を手甲で包んで右拳を突き出すようにして構える。

その行動を見たソリアナは、自らも腰から豪勢な装飾の施された短

杖を取り出して構える。

「いいでしょう、お相手してさしあげますわ！」

「ふん！ 三対一の状況を良く見てから言いいなさい！ リイナ様、クー！ 行きますよ！？」

「はい！ いつでも！」

「任せるニヤ！」

ソリアナの開戦宣言とも取れる言葉を受け、まず始めにナリアが啖呵を切るように言葉を口にする。そして、リイナとクーもその言葉に続くようにソリアナに向かって走り出した。

「清らかな水よ。その身を鋭利な刃とし、我が敵を切り裂け！」  
ウォーター・ブレード  
水の尖刃』！」

「我が友に舞い降り、その身に宿れ。鋭利な矛と強靱な盾よ！」  
ブレード・オブ・プレート  
剣と盾』！」

ソリアナから放たれた魔法は、空間に鋭利な水の刃を出現させ、その刃は寸分違わずリイナとクーを狙う。しかし、その刃をリイナは剣を使っていなし、クーは身軽な体を活かして軽々と避けていく。

その行動を見つめていたナリアは、自らの得意分野である補助魔法をリイナとクーにかける。淡い赤と淡い青の二つの光がナリアから放たれ、リイナとクーを守るようにその体に宿る。

そして、淡い赤の光はそれぞれの武器に纏われ、淡い青の光は体全

体を覆うように広がった。

「なかなかやりますわね。ですが、我が水の尖刃は無数に生産できましてよ！」

ヒュンヒュンヒュン…

ソリアナの言葉通り、水の刃はなくなるところかその数を増し、至る所からリイナたちに迫る。ナリアの補助魔法で強化された身であっても、無数の水刃を裁ききるのは不可能なのだ。

何とか踏ん張る三人だったが、如何せん相手との分が悪い。三対一と構図的にはリイナたちが有利だが、相手は生粋の魔導師で、リイナたちは完全な前衛が二人と補助魔導師が一人。

魔物討伐にはもってこいな組み合わせだが、相手は人間。知能は波の魔物よりはるかに高いのだ。

そのために、ソリアナは自分が完全に後衛に下がり、弱い魔法でも長時間維持できる魔法でなぶり殺す手段をとったのだ。

「くそつ。このままじゃ、近づけないです！ なにか、何か手は…」

「リイナ、魔法は使えないのかニヤ？ 宿屋で確かそんな事言ってなかったっけ？」

お互い背を合わせて、飛来する水の刃を迎撃している最中、クーがリイナにそう質問する。

いかにも妙案と言えるのだが、リイナはクーのそんな淡い期待を見

事に裏切った。

「…私は剣士の家系と言う事で、生まれた時に聖霊の加護を受けれてないんです。魔力を持つて生まれるなんて、思いもしないですから。それに、コントロールもままならないので、下手したら暴発して軽くこの場が吹き飛ぶかも…」

「ニヤ！？　そ、それは本当かニヤ？」

リイナの思いもよらない質問の答えに、クーはかなり慌ててしまう。クーがリイナの話聞いてあたふたしていると、後ろで控えていたナリアが苦笑交じりにやってきた。

「リイナ様の言う通りよクー。リイナ様は齡六歳にして、島を一つ消すほどの魔力を持っていたんだから」

「わー！　そ、そんな事はこんな戦闘中に言うことじゃないですからー！」

リイナの言う通り、今は戦闘中である。朗らかと言っているのかは分からないが、こんな話をしているのは全くもっておかしい。そして、そんな話をしている間にも水の刃を的確に迎撃している所を見ると、戦闘中だと言う事は忘れてしまっただろう。

だが、その態度はソリアナの逆鱗に触れてしまうことになる。

「あ、あなた達…！　私を馬鹿にしていますの！？」

お前の攻撃など恐るるに足らないと言わんばかりに、話をしながら

ソリアナの魔法を迎撃する三人に、ソリアナは拳を握り締める。

「……いいですね。これ以上侮辱をなさるのなら、この技で終わりにして差し上げます！」  
『ベイス・トルナード水の奔流』！」

威勢よく切られた啖呵と共に掲げられた短杖から、巨大な水の竜巻が現れる。その魔法を見たリィナ達は、見覚えのある水の竜巻の出現に警戒の色を強めた。

だが、魔法はもう完成して術者の手から離れている。それを止める術は三人の内、誰も持っていなかった。

「キャア！」

「ニャア！」

「くっ！」

水の刃と言う小さなものは防ぐ事が出来ても、巨大な水の竜巻を防ぐ事は到底出来はしない。そのため、リィナ達三人はその魔法をまともに食らってしまう。

竜巻に吞まれた三人は、その体をぐるぐると翻弄されながら吹き飛んだ。

「はっ！ 呆気ない終わりでしたわね。所詮この程度の敵は私の相手ではなかったと言う事ですわ！」

腰に手を当てて高笑いするソリアナ。だが、この時の彼女は忘れていた。彼女が吹き飛ばした敵の中に、補助魔導師という自らの命を

削っても仲間のために尽力する、そんな者がいたと言つことを。

## 一時の敗北（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします



## リベンジへ

「…う…。…あれ…私、生きてる…?」

ソリアナの魔法によって吹き飛ばされたリイナは、一緒に巻き込まれて吹き飛んだ瓦礫の中で目を覚ました。

目立った外傷は無く、あるとすれば軽い擦り傷とぐるぐるとかき回された時に引き起こされた吐き気程度。ありえない傷の無さにリイナが驚いていると、体が一瞬淡い青の光に包まれる。

「…これはナリアさんの補助呪文ですね…。あ、そういえばクーさんは!? ナリアさんも! いるんですか?」

ほんの一瞬光った体の状況を見ると、その補助呪文がナリアがかけたものだとは判明して納得するリイナ。そして、その事が分かった瞬間、一緒に吹き飛ばされた二人の名前を呼ぶ。

「…ん? あれって、尻尾ですかね?」

二人の仲間を探して瓦礫の中を彷徨っていたリイナが見つけたのは、特徴的な傷がある青暗い色の尻尾だった。

瓦礫の上にペタリと張り付いたように伸びている尻尾を見て、リイナは名案とばかりにある事を思いつく。

分からないなら引っ張ってみればいいんです、と。

「えいつ！」

グイッ

「うニャー！！痛い、痛いニャー！！」

リイナの狙い通り？クーが悲鳴をあげながら瓦礫の中から引つ張りあげられる。

「あ、やっぱりクーさんの尻尾でしたか。見つかってよかったです」

「リ、リイナは悪魔かニャ？」

探し人の一人が現れた事に、リイナは単純に嬉しそうに笑みを浮かべてはしゃぐ。

だが、自らの尻尾をおもいつきり引かれて、さらに瓦礫の中から引きずり出されたクーは、尻尾の生え際を押さえて涙目になっていた。

「ニャー…。引っこ抜けるかと思うほど痛かったニャ…」

「あ、そういえばクーさん。ナリアさん見なかったですか？」

「ナリア？ うーん、一緒に飛ばされた事までは覚えてるんだけど…」

「私ならここですよ」

未だにクーは尻尾を押さえたままだが、残りの探し人の事を二人が心配していると、その探し人の方から現れた。

「あ、ナリアさん！　って、腕を怪我してるじゃないですか！」

現れたナリアは二人よりも怪我がひどく、特に支えられている右腕からはかなりの血が流れていた。

その怪我を見たリイナは、血相を変えてナリアへと駆け寄る。

「なに、リイナ様が心配するほどのものではございません。骨に以上はありませんし、こうすれば……」

心配するリイナを落ち着かせるように笑いかけると、治癒系の補助呪文を自らの体にかけるナリア。

薄く光る白い光は、ナリアの腕や特に怪我がひどい箇所を巡っては消えていく。

「……ペイン・ブロック『痛覚遮断』の魔法をかけただけです、治ってはいませんが戦えますよ」

「でも、戦えるって言っても、あの人には勝てないですよ。組み合わせが悪すぎます」

「そうだニヤ。大分飛ばされちゃったし、水を被ったせいで鼻もあんまり利かないニヤ……」

腕をぐるぐると回して大丈夫だと言い張るナリアだが、リイナとクーはそれぞれの理由をつけて言い淀んでしまう。

リイナ理由は組み合わせが悪い事。確かに、もう一度挑んでも対

処法がない今の段階では、また魔法をくらうだけである。

クーとしては、単純に相手の位置が分からないと言う理由なのだが、鼻が利く獣人族にとっては大きな理由であり、それはナリアにも分かっているはずだ。

だが、ナリアは毅然とした態度で二人の意見を思わぬ言葉で否定した。

「それは分かっています。ですがリイナ様、あなたほどの魔力の持ち主であれば、勝てるかもしれません」

ナリアのその大胆な発言に、当の本人であるリイナよりクーの方が大きく反応していた。

「え？ それはどう言う事ニヤ、ナリア。リイナはもし暴発したらここら付近が軽く吹き飛ばんでしょ？」

「確かにクーの言う通りなんだけどね。でも、私に考えがあるの。リイナ様の魔力を、私が制御します」

「私の魔力を？ ダメです！ そんな無茶をするなんて…！」

クーの懸念を他所に、ナリアはキツパリと自分の考えを明かす。

ナリアのその大胆な考えに、リイナは拒否の声をあげる。

「いくらナリアさんが補助魔導師と言っても、他人の魔力を制御するなんて危険すぎます！」

リイナの言う通り、ナリアの考えはかなり危険なものだ。

魔力は人それぞれ質も量も全く違う。加護を受けた場所や、その加護の儀式の形式からも魔力の質は変化してしまうのだ。

そのため、魔力の受け渡しによる魔力の回復や、他人の魔力を制御して魔法を放つ事など不可能なのである。

だが、ナリアは自分の事を心配するリイナに対し、自らの考えを話し始める。

「それができるはずなんです。もちろん、リイナ様にも手伝わってもらわなければなりません」

「手伝うって…今の私には魔力の制御なんて…」

肩をつかみ、問いかけるような雰囲気のリイナに話すナリアだが、当のリイナ本人は自信無さげに俯くばかりだった。

そんなリイナを見るナリアは、構わず話を進める。

「厳密に言えば、制御するではありません。リイナ様の持つ、その剣を使うだけです」

「え？ 『セントクルセイダース』を？」

「はい。たしかその剣には魔力伝導率の高いマルナライトが使われているはずです。その特性を活かせば、やれるはずです」

ナリアの言葉に、リイナは自らの腰にさした片刃の長剣を眺める。

このセントクルセイダースはリイナの希望により、独特の刃の形状をしている。片刃と言うだけでも珍しく、それに加え剣身は薄く美しい。これはリイナが『叩き切るのではなく、斬り裂く剣を』と言う考えに沿って作られたためである。

「この剣に、そんな可能性があると言うんですか？」

「あくまでも可能性ですが。剣身が薄く、とてもリイナ様の魔力に耐えられるとは思いません。ですが、だからこそそれを私が制御するのです」

自信をもってそう言うナリア。強い意思を持った目でリイナを見つめるナリアは、どこか鬼気迫るものがあつた。

そんな中、なかなか話に入れなかったクーが声をあげる。

「んー。全く話が分からない、と言うか全くついていけないんだけど、結局クーは何をすればいいのかニヤ？」

「あつ、ごめんなさい。えっと、クーはあの高飛車な娘の注意を引いてもらいたいの」

「…つまり、囧？」

「そうとも言つ」

「えー！ー！！」

ナリアの作戦を聞いて、自分に割り振られた位置の理不尽さに、悲

鳴にもとれる叫び声をあげるクー。

「でも、重要な役割よ？ 私たち二人に攻撃が飛んでこないようにしてもらいたいの」

「うー…。できるかどうか分からないけど、やれるだけやって見る  
ニヤ」

拳を握りしめ、ナリアのお願いにやる気を見せるクー。

それを見たナリアは、リイナの方に向き直って最後の言葉を発する。

「リイナ様。ご決断をお願いします」

「…分かりました。でも、ナリアさん。…死ぬ事だけは絶対に許さない  
ので、そのつもりでお願いしますね？」

ナリアの意見を認めて、俯いていた顔をあげるリイナ。

その顔は悲しそうな色を残していたが、少しおどけてリイナがそう  
言くと、ナリアはどこか緊張していた顔を崩し、軽く笑みを溢した。

「ええ。あなたの事をレイソル様から頼まれているのです。そう簡  
単に死ねませんよ」

「…そうですか。なら、なおの事勝たないといけませんね！ じゃ  
あ、行きますよ。リベンジです！」

「はい！」

「おー！」

小さく拳を掲げ、気合を入れて宣言するリィナ。その行動に、他の二人も一緒に手を掲げた。



## リベンジへ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 勝利へ

「しくじりましたわ…」

ずれた眼鏡を直しながら、ソリアナは自らの魔法で吹き飛ばした三人の行方を捜していた。

本来、戦った相手の死体等を見つけておかないと後々の作戦に支障が出る。例えば、殺したと思った相手からの思わぬ反撃など、絶対に食らいたくは無いからだ。そして、その相手が自分にとって苦手な戦法を取る場合は尚更である。

「ブレイク・ピラーの二重人格も先ほどの爆発から見えておりませんし…。まあ、あのような下賤な輩が死んだ所で私には関係ないのですが…」

ソリアナが言っているのは、ちょうど三人を吹き飛ばした辺りに起きた、炎魔法と氷魔法のぶつかり合いの事だ。

その余波はソリアナのいる所まで届いており、特にその後に来た冷気の突風は凄まじいものだった。

咄嗟に同じ作戦を進行中であり、その作戦参謀であるブレイクの心配をしたソリアナであったが、すぐさまブレイクがいけない自分の嫌いな人間だと思い出した彼女は、心配を直ぐに放棄した。

ガラッ

「…ああ、もう！ 自分でやったことと言いますが、ここまで歩き

にくくなつてるとは思いませんわ!」

魔法に巻き込まれ最早廃墟以上になった街を、ソリアナが危なっかしく歩く。

時々瓦礫に足を取られているからだろうか。ずれた眼鏡を直す暇も無く、ただ苛立ちを募らせながら歩いてくソリアナ。

「全く、鬱陶しい事この上な……見つけましたわ」

何回目になるか分からない愚痴を吐こうとした時、ようやくこちらに向かつてくる三人を見つけたソリアナ。唇を吊り上げ、真っ直ぐ歩いてくる三人を好戦的な視線で見つめる。

その視線に気づいた三人は、当初の狙い通りにクーが前に出て、リイナとナリアがその影に重なるように後ろについた。

前とは違う布陣にソリアナは眉を少し顰めたが、すぐに挑発の為に口を開いた。

「…逃げなかった事はお褒め致しますわ。ですが、何度向かってきても無駄だと言う事が分からないのですか?」

「誰もあんたなんか褒められても嬉しくないニヤ!」

その挑発に乗った形になるのだろうか。クーが拳を振りかざしてソリアナへと突っ込んでいく。

だが、後ろに控えていた二人はクーの行動を無視して魔力を集中し始めていた。

「ふん！ 何度向かってきても同じだと言うことを、教えてさしあげますわ！」

突っ込んでくるクーやその後ろにいる二人に向かって、『水の尖刃』  
ウォーター・ブレード  
を展開して攻撃を行うソリアナ。

飛んでくる水の刃を、クーは作戦通りに後ろの二人に飛んでいかないように全てを打ち落としていく。獣人族らしく、素早い動きで飛ぶ水の刃を落とす様は、まるで狩りをしているようだった。

その証拠に、かなりの重労働のはずがクーの口元は笑っていた。

「いえーい！ やっ！ 案外楽しいよ、これ！」

拳句の果てにはそのような言葉を口にしながら、楽しそうに水の刃をその拳や足を使って叩き落していくクー。

だが、その行動はもう一度ソリアナの逆鱗に触れることになった。

「…あ、あなた！ 一度ならず二度までも私を侮辱いたしますの！？」

手をわなわなと震わせ、内から込み上げる怒りを抑えようとしているソリアナ。

「…いいですわ。あなたはこれで殺して差し上げます！ 『清き水の凶刃』！」  
ピュオター・エッジ

威勢よく言った言葉を皮切りに、クーに飛来していた水の刃の形が

変わった。

これまではあまり規定の形の無かった水の刃が、明確な剣の形を持つてクーに襲い掛かる。その剣の形は細長く、今までのように拳や足を使って叩き落す事は不可能なものになっていた。

「いたっ！ 避けるしかないじゃ…ニヤッ！」

より鋭利になった水の剣は、ほとんどクーしか狙わなくなってしまうっていた。

それもそのはず。ソリアナの目はクーにしか向けられていないし、この魔法は水の尖刃より制御が難しい技のため、集中が他に向いている暇が無いのだ。

だが、その事は後ろで魔力を練っていた二人にとっては好都合だった。

「いいですかリイナ様。自分の体に流れる魔力の流れを意識してください。それが出来れば、後は私が引き出します」

「自分の中にある魔力の流れ…」

リイナはナリアのアドバイス通りに、自らの魔力の流れを意識する。体に流れる血の巡りを意識するような行為で、かなりの集中力があるものであった。

目を閉じ、呪詛のようにナリアの言葉を呟きながら集中するリイナ。その額には玉のような汗が浮かんでいた。

「…くっ…」

それはナリアも同じで、リイナの魔力の変化を少しでも早く捉えようとしているために、こちらはかなり集中しきっているようだっただ。

「…流れ…魔力を…意識…。…っ！」

「リイナ様！ そのまま、魔力を体の中に閉じ込めるようにして下さい！」

ブツブツと呟きながら魔力の流れを掴もうとしていると、リイナは自らの体が栗立つのを感じた。そして、その体から無色の淡い輝きが放たれ始める。

その事に気づいたナリアが、次の段階に移行する為にリイナに指示を飛ばす。自らも魔力を練り、魔法を発動させるナリア。

「…なら…こう…そこ！ 『マジック・ブースト 魔力増幅』！」

リイナの体から溢れる淡い光を、ナリアは自らの魔力の流れと照らし合わせるために魔法を発動する。制御しきれずに不規則に揺れる魔力の波長を見極め、それを上書きするように補助魔法を発動させる。

だが、対象者の魔力をそこから強化するこの魔法は、リイナのような制御できずに魔法を暴発させるような者にとってはかなり危険なものである。

なぜなら、魔力を底上げする事は魔力総量を一時的に上げると言う事であり、ただでさえ暴発する危険性がある術者に魔法をかけるこ

とは被害を大きくさせる可能性があるからだ。

しかし、ナリアはあえてこの方法を選んだのだ。リイナ精神力と、運を信じて。

「くう…。体が、熱い…」

「リイナ様！ 耐えてください！」

内から溢れる魔力の大きさに、リイナは苦悶の表情を浮かべて膝をついてしまう。ナリアの補助魔法の効果もあつてか、次第に強まる無色の光を見たナリアは励ましの声をリイナへとかける。

その声を意識の外で聞きながら、リイナは自らの体を駆け巡る力に向き合っていた。

「大丈夫…大丈夫だから…。…これは、私が持って生まれた力なんです。…だから…だから　　！」

体を折り、自らの腕で体を支えるようにうずくまったリイナは、溢れる魔力に語りかけるように呟く。

そして、顔を空に向けて叫んだ。

「…私の…私の言う事を聞いてよー！！」

カチッ

リイナが叫び声をあげた瞬間、何かがはまる音が一帯に響く。決して大きくはないが、不気味にも頭に響くような音に、残りの三人は

全ての動きを止めた。

そのはまる音を体の中から聞いたリイナは、その音に不自然な違和感と不自然な納得感を覚えていた。

「…成功、したの…？」

「な、何なのニヤ？ あの変な音は！」

「…あははは！ な、何が起きたかは分かりませんが、何をしようが結局は同じ事。お仲間と一緒に死んでしまいなさい！」

音の違和感にナリアは不安げにリイナの魔力の制御の成功を疑い、クーは急に聞こえた音に驚いて尻尾を逆立てていた。

だが、その音が響いた後もソリアナはすぐに気を取り直して、盛大に笑い声を上げる。動揺こそすれ、しかしソリアナは短杖を持った右手を掲げてそう宣言する。

放たれたのは、一度三人を吹き飛ばした水の奔流。今回はナリアの補助魔法は使われていない。そのため、ともに食らえば今度こそ命はないという水の大竜巻を、リイナは真っ直ぐに見ていた。

腰から、愛剣のセントクルセイダースを抜きながら。

「…やあ！」

抜き打ち一閃。

短い気合と共に振り抜かれた剣は、かつてゴロツキを気絶させたも



のよりも早く、何より剣身が淡く光っていた。

そして、剣から放たれた淡い光の剣閃は寸分変わらず、リイナたちに迫る水の大竜巻を真一文字に切り裂いた。

「んなあ！ な、なんと言う事ですの！？ 私の『水の奔流』ベイズ・トルナードが真つ二つに…！」

「…す、すごいニヤ…」

「…これが、リイナ様の本当の魔法のお力…」

リイナから放たれた剣閃がいとも容易くソリアナの魔法を切り裂いた事に、三者は違う言葉を口にしたが、皆一様に驚きを隠せなかった。

ソリアナは自らの魔法が切り裂かれた事を、信じられないと言った顔で見つめ、クーはその威力を見て感嘆の声を上げていた。

そして、その力を引き出す手伝いをしたナリアはリイナの魔力とその威力を見て、ただ呆然と呟く事しかできなかった。

「…次は、あなたの番です！」

剣を中段に剣身を真横に寝かせて構えるリイナが、小さいがしっかりと聞こえる声音でソリアナを見つめる。

その視線を受けたソリアナは一瞬ひるむが、すぐに薄く笑って意趣返しのように叫ぶ。

「っ、次ですって？ わ、私にはまだ手はございましてよ？ それに、あなたのような者が一人増えた所で何も替わりはしませんわ。なぜなら、その二人はもう役にはたたないからでございましてよ！」

「…何の事です？ クーさんはまだ元気だし、ナリアさんだって…」  
ソリアナの叫びを疑い、周りにいるであろう仲間の事を確認するリイナの口がそこで止まる。

リイナが見たのは、これまで通り水の刃を迎撃するクーと、その後ろで蹲っているナリアだった。

「っ！ クーさん！ ナリアさん！」

突然の仲間の防戦の展開に、リイナは名前を呼びながら駆け寄ろうとする。だが、リイナ自身にも飛来した水の刃が、容赦なく襲ってきた。

飛来する水の刃を、剣身や剣閃で迎撃するリイナだったが、このままでは仲間を助けに向かうことも出来ず、唇を噛み締めるだけだった。

「…やはり私の敵ではありませんわね！ それにあの補助魔導師、あのようなボロボロの体で出てくるなど、何を考えていらっしやるのかしら…」

水の刃を制御しながらだが、ソリアナは単純な疑問を口にする。

ソリアナはクーとナリアに対して水の尖刃を放った。しかし、その

水の刃は一度たりとも二人に届いてはいないのだ。ソリアナにとっては非常に不本意だが、全てクーが叩き落してしまっているためである。

だが、すぐにナリアは体を押さえて蹲ってしまった。そして、それに気づいたクーが自分の後ろにナリアを隠し、今もなお水の刃を迎撃しているのである。

そのソリアナにとっては不可解な行動は、疑問となってソリアナの口からこぼれたものだったが、その言葉はリイナの逆鱗に触れるものだった。

「はぁー!!」

叫び声を上げ、一気に自分に迫る水の刃を叩き落とすリイナ。そして、ソリアナを睨みつけるようにリイナはその顔を向けて、剣を片手で肩に担ぐようにして構える。

その意図が掴めなかったソリアナは、眉を若干顰めながらもさらに挑発の言葉を口にする。

「以外にやりますわね。ですが、なぜあの様な者たちの事を気にするのです？ あのように役になんてたたない者たちの事を。私には分かりませんわ…」

首をやれやれと言った風に振り、眼鏡の位置を直すソリアナ。

そのリイナにとっては腹立たしい行動と言動は、意図してかどうか、リイナの珍しい行動を引き出した。

「…ほんと、そうですね。私にも分からないです」

構えていた剣を下ろし、俯き気味にそんな事を喋るリイナ。それを見たソリアナは、軽くリイナに向かって手を差し伸べながら近づいて行く。

「なら、あの様な者たちはほおっておいて、私と踊りませんか？」

「いいですね。うん。それはとっても良い案だと思います！」

ガキン！

リイナの愛剣と、ソリアナの短杖がぶつかって嫌な耳障りな音をあげる。

今までうつむき加減で剣を下ろしてしまっていたリイナからの思わぬ反撃に、ソリアナは軽い悲鳴をあげながらも応戦する。

「な！ 何をなさりますの！？」

「決まっています。…これが私の、答えです！」

「ちっ！」

上段、中段、下段、抜き打ちと様々な形に構え方を変えるハーキユーリー流の剣技に、ソリアナは苦戦する。

第一、生粋の魔導師であるソリアナは、今のような接近された戦い方はしない。詠唱時の集中や、きちんとその魔法の対象者を見ていなければならぬためである。

そして、ついには短杖を使った錨迫り合いを演じてしまい、ソリアナは舌打ちをするしかなかった。

その錨迫り合いを演じる中、リイナは気になっていた事を口にする。

自らを苛立たせる、ソリアナの考え方を。

「…なぜ、あなたは人の考えを軽んじているんですか？」

「軽んじる？ 私にはただ分からないだけですわ。下賤な下自民の考えなど」

ソリアナが吐き捨てるように言った言葉に、リイナは戦慄を覚えた。

自分自身もハーキュリー家と言う家に生まれ、王やそれに与する身分の高い者としてそれなりの待遇を受けてきた事はあったが、リイナはそれを決して傲る事はなかった。

むしろその対偶を嫌っていると言ってもよく、リイナ自身は親たちや使用人のいる本家のお屋敷には住んでいない。本家に程近い離れを使って鍛錬の日々を送っているのである。

だからこそ、ソリアナのその態度や言動にリイナは戦慄を、怒りを覚えていた。

「…なぜ、そんな事が言えるんですか…。まさか、自分が特別な人間だなんて思っていないですよ…？」

自分の中に渦巻く苛立ちを押さえ込み、ギリギリとソリアナに向け

て力を込めていた剣を引くリイナ。

目の前にあった刃が引かれた事に、ソリアナは内心安堵しながらも  
気丈に振る舞う。

剣を引いて呻くように尋ねるリイナに、ソリアナは自分の素直な思  
いを口にする。

「？ 別に私は自分が特別な人間だとは思ってはいませんわ。ただ、  
選ばれた人間であるという自覚はありますけれど」

「選ばれた人間？ どういう事ですか？」

「簡単な事ですわ。私はただ帝国の王、クルト王に選ばれてここに  
いるのですわ。それが選ばれた人間という証拠でしょ？」

「そうですか。なら、あなたは私が一番嫌いなタイプの人ですね」

「え？ 何を…」

おっしゃっているの？とは続けられなかった。リイナがソリアナに  
向かって再び突進してきたためだ。

突進してきたリイナを、ソリアナは横に転がる事で避ける。彼女自  
身にとっては無様極まりない行為だったが、最大限に伸ばされた剣  
の切っ先を避けるにはそうするしかなかったであろう。

渾身の突進を避けられたリイナは、足を思いっきり地面に突き刺す  
ようにして強制的に方向を変える。

そして、剣を大上段に構え、思いつき振りかぶった形をとった。

「…あなたみたいな人は…！ …潰れて、下さい！！ 『プレッシャー・ブレード』！！！」

大上段に構えた剣から、リイナの叫びと共に眩い光が輝く。無色の輝く光は、リイナの剣を中心に爆発的にその輝きを強める。

そして、リイナはその輝く剣を一気にソリアナへと振り下ろした。

「な！？ こ、この魔力量は…！ キャアー！！！」

目の前に迫る膨大な魔力の奔流に、ソリアナはただ呟く事しかできずにその奔流に巻き込まれて悲鳴をあげた。

## 勝利へ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします



## 不可思議（前書き）

…感想どしどし待ってマース…

## 不可思議

「…す、すごいニヤ…」

クーは、目の前で起こった滅多な事では見ることができない現状に目を白黒させていた。

クーの目の前、つまりリイナが技を放った後には、大きなクレーターが穿たれていた。その中心には、地面に軽くめり込む形で瓦礫と共に埋まるソリアナの姿があった。

「はあ…はあ…はあ…」

一気にかかなりの魔力を放出したため、リイナは初めての虚無感に襲われていた。

体力の消耗とはまた違う苦しさに膝に手をつき、荒い息を吐いていく。

そんなリイナに、近づいて来ていた二人分の手が肩にそつと置かれた。

「はあ…はあ…。…クーさん、ナリアさんも…。…無事で良か…」

ドサッ

「うわぁ！リ、リイナ、大丈夫かニヤ！？」

力尽きたように崩れ落ちたリイナに、体中に切り傷を作ったクーが慌てて支える。

しかし、突然リイナが倒れた事にクーはひどく慌ててしまつて、ただリイナの体を支える事しかできなかった。だが、その後ろから、クーやリイナよりひどい怪我をおったナリアが、クーを落ち着かせるために口を開く。

「大丈夫。急激な魔力の流れに、体がついていけなくなっただけでしよう。眠っているだけです。それより、早く横にさせてあげなければ……」

「あ、それもそうだな。それじゃあ……あそこで」

崩れた瓦礫の中に、ちょうど良い大きさの空間を見つけたクーは、そこにリイナをナリアの指示通り寝かせる。

その行動を見届けた後、ナリアは自分とクーに『ペイン・ブロック痛覚遮断』をかける。

自らの体を巡る淡い白色の光を、クーが面白そうに見ているとリイナが大技を放った地点から突然音が聞こえてきた。

「……よ、よくもやってくれましたわね……！……このソリアナ・レツドフィールド、一生の不覚ですわ！」

怨嗟の声を漏らしながら、崩れ去った瓦礫の中から現れたのは髪や服、身につけている物すべてをボロボロにしたソリアナだった。

リイナの魔力によつてできた軽いクレーターの中心から這い上がってくる姿は、その身なりと相まって恐怖を覚えさせるものだった。

「な、なに？　まだやる気なのかニヤ？」

血走った目で見つめられたクーは、その後ろで倒れて眠るリイナと、それを見守るナリアを守るために再び拳を構える。

それを見たソリアナは、寧猛な笑みを浮かべてボロボロの体でありながらその手を動かす。

その姿は、リイナを怒らせる事になった自分の分からない姿と同じであつたが、今のソリアナにはそんな事は分からなかつた。

「……ククク……。殺して差し上げますわ！　私の最大の魔法、『水神の……！』」

ザクッ

「っ！」

「ぐはっ！」

寧猛な笑みを崩さぬまま、クーに向かって自らの怒りのままに魔法を放たんとしていたソリアナの体から、漆黒の大剣が生えた。

ソリアナの身の丈をゆうに越えるであろう漆黒の大剣を、ソリアナは信じられないと言つた顔で見つめる。クーは急に自らの敵の体を貫いた大剣の出現に、ただただ驚く事しかできなかった。

「…な、なぜ…私が…がふっ！」

それだけを口にし、ソリアナは口から大量の血を吐きながら地面へと倒れる。

その時クーは、倒れていくソリアナの後ろにいた人影を見た。

真っ黒なローブを着込み、異質としか言いようの無い雰囲気醸し出す人影を。

「…はっ！ ま、待つニヤ！！」

その異質な雰囲気飲まれていたクーだったが、気を持ち直して追いかけようとすると、その人影はソリアナの体に刺さった大剣を引き抜いた後、影に溶け込むようにして消えて行ってしまった。

その事にクーは悔しそうな顔をしたが、すぐに倒れたソリアナやリイナ達のいる場所へと踵を返した。

「あ、クー。どうしたの？ さっき物音がこちらから聞こえてきたのだけけど…」

暗い表情でこちらに戻ってきたクーに、ナリアは心配そうに状況の説明を求める。

「…ソリアナが死んだ。真っ黒な大きな剣に後ろから貫かれて」

「え？ そ、その剣はどこに？」

「変な雰囲気の方が持っていたニヤ。それに、ローブを着込んで

たから顔とかまでは分からなかったよ。でも、体の感じからしてみたら、男で間違いないと思う」

「そう、ですか…。なら、その男は一番気をつけなければならない相手のようなね…」

顎に手を当て、真剣な表情で考えるナリア。しかし、すぐにそのしかめっ面を止めてクーに提案を持ちかける。

「ねえ、クー。このままリイナ様と共に王様の護衛に向かいましょう。もちろん、リイナ様が起きてからだけれどね」

「王様の護衛？　どういう事ニヤ？」

「そのような男がいるのなら、シリアナ王にも知らせておかないといけないし、それにその方が帰って安全だと思うの」

「んー。でも、クーにはあんまり…。あ！　それならシオン達のところに戻ればいいにニヤ！　シオンにソリアナの事も聞けるし、もしかしたらユフィーやカナがその男の事も知ってるかも！」

ナリアの意見に終始考えている様子だったクーが、これは名案だとばかりに手を叩きながらナリアに話を持ちかける。

だが、そのナリアはというと、知らない人の名前が何人も出てきた事に眉を顰めていた。

「クー？　その人達は誰なの？」

「仲間ニヤ！　最近知り合ったんだけど、それでも仲間ニヤ。みんな

ない人だよ」

誇らしげに胸を張ってナリアの質問にそう答えるクー。

そんな精一杯体を大きく見せようとするクーを見て、ナリアは苦笑と共にクーの意見を受け入れた。

「ふふ。分かったわ、クー。情報は大事だし、その者達はリイナ様の事も知っているのでしょうか？　なら、クーの意見に従うのは当然ね。…でも、できれば皆の事を見ていたいんだけど…」

そういうナリアの表情には、暗い影がさしていた。

心の内では次に何をすればいいのかは分かっているのだが、やはり倒れた仲間の事が気にかかるのだろう。

今となってはどこにいるのかも分からなくなった仲間の事を思っ、遠い目を死ながらクーを見ていた。

「…うう……ナリア、さん？」

クーがナリアの言葉に言葉をつまらせていると、リイナが呻き声をあげながら目が目を覚まして体を起こそうとしていた。

その行動を見たナリアとクーは、いち早くリイナの元に駆けつけ、その体を支える。

「あ、ありがとう、ございます…ナリアさん、クーさん…」

「リイナ！　まだ寝てないとダメだよ！」

「クーの言う通りです！ あなたはまだ魔力の放出に慣れていないのですから、あまりご無理をなさらないで下さい」

支えてもらったことに感謝するリイナだが、その支えた張本人である二人は口々に不満と叱咤の声をあげる。

だが、リイナは心配する二人に対し、手を差し出して笑いかけた。

「えへへ…。私なら、大丈夫ですよ。それより、早く皆の所に帰って話をしないと…」

「皆？ ああ、シオンとか言う人達の所ですね」

「え？ どうしてナリアさんが知って…」

「それならクーが教えたのニヤ」

えっへんとも言つように胸を張ってリイナの疑問に答えるクー。

「そうなんですか？ でも、それなら話は早いです。シオンさんは帝国内部の情勢にある程度詳しいようですし、ユフィーさんは私のこの魔力についても分かるはずですよ」

「ユフィー？ と言うと、あの有名な召喚魔導師、ユフェルニカ・シーファスの事ですか？」

「はい。兄様の紹介で出会ったんです！」

力強く、兄様と言う単語を強調しながら嬉しそうに答えるリイナ。



その嬉しそうなリイナを見て、ナリアは今はどこにいるのかも分からない騎士団団長殿を思い浮かべてため息を吐いた。

「レイソル様が……。しかし、あの方の交友関係は計り兼ねる所がありますね。あの変人と言われる召喚師に顔が利くのですから……」

「んー。ほんとに一回リイナのお兄ちゃんに会ってみたいものだニヤ」

ナリアがため息を吐くとほぼ同時に、クーも違う意味のため息を吐く。

だが、すぐにため息を吐きなくなるような気分押さえ込み、話を元へと戻すナリア。

「……えー、それでは、その私にとっては協力者と言う形ですが、その者達の所へ戻ると言う事でよろしいですか？」

「クーはそれでいいニヤ。でも、ナリアは……」

先ほどのナリアの気持ちを知っているからだろう。ナリアを心配そうに見つめるクー。

だが、ナリアはそんなクーに対して薄く笑いながらこう言った。

「構わないわよ。こんな所で私情を勇戦させる訳にもいかないし、残りの近衛隊の面々を探してこの事を伝えていかないと……」

「そう、なのかニヤ」

「ええ、そう言う事なの」

再度、心配そうなクーに笑いかけるナリア。

自分にとつても、それが一番だと言い聞かせるように、しっかりと。

その決意にも似た声を聞き、クーはもう何も言わなかった。

二人の一連のやり取りに、リイナは置いてけぼりになってしまっていたが、話が終わった事を確認すると、行動を開始するために声をあげた。

「なら、シオンさん達の所に戻りましょう。あつちで良かったですよね?」

威勢良く、シオン達と別れた方向とは真逆の方向を指差すリイナ。

「リイナ、そつちはお城の方だニヤ。なんでもう一回お城に行かないといけないのニヤ?」

「ふふ。さすがリイナ様ですね」

「ええ!? だって、あつちから流されて、それでいてこつちに歩いてきたんですから…」

「あつちやこつちって言つたつて分からないニヤ」

ぐるぐるといろんな方向を指差しながら、何とか二人に笑われないように方向を定めようとするリイナ。

だが、毎回指を差す度に差す方向が変わるのを見て、ナリアは笑い、クーは呆れる事しかできなかった。

「あ、ならこつちですね!」

「そっちはお城だって言ってるニヤ!」

「ええ!!」

「ふふふ。楽しいですね、本当に!」

## 不可思議（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 新たな決意

「…フォーゲルノート帝国は、エスカレルニア王国に宣戦布告します」

無情にも、トラヴァスが発したその言葉は、シオンがもっとも聞きたくない言葉だった。

「そ、そんな！ くそっ！」

ドスッ

その言葉にシオンは膝を折り、崩れてしまう。そして、自らの認識の甘さに苛立ち、地面をその拳で殴りつける。

「…僕は、いったい何のために…！」

「ちょっとシオン！ そうやって下を向くのは止めたんでしょ!？」

「カナ…」

下を向き、自分のしてきた事が本当に正しかったのか悩むシオンに、カナが叱責の言葉をかける。

「ぐじぐじ悩む必要なんて無いじゃない！ 私もいるし、ユフィーちゃんやリイナちゃん、クーちゃんもいるの！ そう言う時ぐらい、仲間に頼りなさいよ！」

「……でも…」

「っ！ でもじゃない！」

ドガッ

カナの言葉に、シオンがまだ下を向くことに苛立ったのか、思いっきりシオンを殴り飛ばすカナ。

「な！ 貴様！ シオン殿下になんて事を！」

「うるっさい！ あんたは黙ってて！」

「なっ！」

今まで口を出さなかったトラヴァスだったが、かつての主 今でも彼の中でもシオンは守るべき対象であるが を殴り飛ばされた事にたまらず声をあげる。

だが、そんな事を気にするカナではない。

トラヴァスを一切見ることもなく声を上げ、強制的に黙らせる。

「ああもうまったく！ 諦めるのはまだ早いつて言ってるの！ ユフィーちゃんにも言っただんでしょ？ お父さんを止めたいって！」

「…うん。確かに言った」

「なら諦めない！ せっかくの期待を、態々裏切る必要なんか無いでしょ？」

「…うん。ありがとう、カナ」

「礼なんかいらないわよ。そんな事より、今はこの状況を何とかしないといけないんだけどね」

そう言つてトラヴァスの方に体を向け直し、自らの愛槍『レストーシヨン』を構え直すカナ。

シオンも体を起こし、カナの隣にゆつくりと並ぶ。

そして、トラヴァスに対し口を開いた。

「…トラヴァス。一応聞くけど、父上は本当に宣戦布告をしたんだね？ それに、その宣戦布告をエスカレルニア王は受けたの？」

「はい。確かにクルト王は宣戦布告をなさりました。受け取ったかどうかは私には分かり兼ねますが、武王と呼ばれる方です。受けない訳がないでしょう」

シオンのゆつくりとした質問に、トラヴァスもそれに合わせるようにゆつくりと答える。

今のエスカレルニア王、シリアナ・フィールダーは、豪胆で好戦的な性格で知られている。

自ら率先して武芸を学び、それを誇りに思っている。周りの忠臣達が止めても止まらない、そんな王である。

だからこそ、トラヴァスはそう答えた。宣戦布告などと言う、普通

では考えられないような単語をも受け止め、それに答えてくれるであろう、と。

「そっか……。でも、僕は抗うよ。抗って抗って、その先に何があっても、必ず父上を止める。そのために帝国を出たんだから」

「ですが、あなた一人の力で何ができるのですか！　もう戦乱は始まりを告げ、王国側がこのまま黙っている訳がありません！」

シオンののはつきりとした決意に、トラヴァスはありえないと言った声をあげる。

トラヴァスの言う通り、ここまで王の住まうクルメニアの街を焼かれては、誰もが怒りを覚え、帝国を恨む。

あの者たちにも同じ目に合わせてやる、と。

それが分かっているトラヴァスは、当初はこの作戦には猛反対していた。だが、ブレイク以下の参謀たちに押し切られ、今この場所にいるのだ。

そんな事をまったく知らないカナは当然とばかりに非難の声をあげる。

「ちょっと！　その戦乱の始まりにはあんたも加担してるんでしょうが！　今この場所にいることがなによりの証拠よ！」

「俺も初めは反対したさ！　でも、ブレイクや帝国直属の親衛隊の者たちがそれを阻んだ！　我らと違う考えを持つ者が怖くは無いのかと！」



「っ！」

トラヴァスの叫びに含まれていた聞き逃す事の出来ない言葉に、二人は息を呑んだ。

そして、シオンは恐る恐るその言葉の真意を確かめるために、トラヴァスにこう言った。

「…トラヴァス、まさかとは思うけど…それってルナニスクルメアと言う組織が絡んでる？」

「その通りです。前々から兆候はあったのですが、止められませんでした。やはり、ただの騎士団所属の俺なんかには…！」

怒りや自分のやるせなさからか、敬語を忘れて話し方がぐちゃぐちゃになってしまっているが、この際シオンもカナもトラヴァスも、その事にはまったく構わなかった。

「な！ 兆候はあったってどういう事？ まさか、シオンが帝国を出た辺りからじゃないでしょうね？」

「…その通りだ。シオン殿下が帝国から出奔なされた頃から、あいつらの活動は活発化している。王宮前の広場で大々的に演説をするなんて事もあった」

「王宮前の広場を使うなんて、普通じゃ絶対に出来ない…。なら、やっぱり父上や他の者が手を回しているの？」

「俺には分かり兼ねますが…。ただ、これだけは言えます。フォー

ゲルノートの民や王宮に使える者、ほとんどの者がルナニスクルメアの信者になっています。ですので、今帝国に向かうのはほぼ不可能……いえ、無謀かと」

トラヴァスのその発言に、今まで勢いづいていたカナも押し黙ってしまう。

だが、シオンだけではその発言に対して冷静だった。

「……その通りだろうね。ルナニスクルメアの奴等は僕の力、いや、この『時の証』<sup>エヴィデンスロック</sup>を狙っている。父上もこれを狙っていたからね」

そう言いながら、服の下に仕舞っていたあまり装飾のなされていない十字架を取り出す。

そして、服の中から取り出した時の証を手に、トラヴァスへと向ける。

「君も、これが目当てなんだろう？」

「いえ、断じて違います！ 確かに俺はその時の証以下、あなたの身柄を帝国へと連れ帰れと命ぜられました。しかし！ この様な惨事を目の当たりにして、俺にはそんな事が大事だと思えないんです！」

頭を振り、分からないと言うように顔を手で隠してしまうトラヴァス。

「ふんっ！ どうだか！？ 結局この場に来ているあんたの事なんて誰が信じるのですか！」

カナはそんなトラヴァスに対し、辛辣な言葉を投げかける。

元々勝気で元気が取り柄の彼女にとって、先ほどの戦闘などの不完全燃焼になってしまふ事は嫌いである。

そのため、トラヴァスの態度や、なかなか本気にならずに、基本的に手加減して矢を射るだけのトラヴァスの戦い方が単純に気に入らないのだ。

鼻を鳴らし、腕を組んでそっぽを向いてしまふカナに、シオンはただ苦笑するしかなく、言いように言われたトラヴァスも無言を貫いていた。

「ははは…。ひどい言われようだね、トラヴァス」

「仕方ありませんよ。…結局俺は、何をすればいいのか、何を信じていけばいいのか、もう分からないんですから」

肩を竦め、やれやれと言った風に首を振るトラヴァス。

だが、すぐに真面目な表情に戻ってシオンに向き直る。

「ですがシオン様。これからどうなされるおつもりですか？ 王国の王家関係者の者にはあなたの顔は知られています。今からあなたがシリアナ王の所に向かって…」

「無駄、ではないよ、トラヴァス。顔を知られていると言っても、あれはもう何年も前の話。何とかなるさ」

トラヴァスの懸念をよそに、その言葉を継ぎながらシオンが安心させるように笑いながら言う。

「ですが…！」

「…僕には、仲間がいるんだ。こことは他に、ブレイクを止めに言ってくれたユフィー。城に状況把握のために向かっているリィナとクー。そして、ちょっと不機嫌だけど、カナがいる」

「ちょっと！ 急にそんな事言わないでよね！ それに、ちょっとじゃなくてけっこう不機嫌！」

顔をほぼシオン達とは反対方向に向けていたカナだったが、急に話の中に自分の名前が出てきた事に広義の声をあげてシオンに掴みかかる。

「わあ！ ごめんってば！ かつこつかないでしょ！？」

「むっう…」

掴まれそうになったシオンは、伸ばされるカナの手を何とか避けながら謝る。

結局、掴もうとしていた手を避けられてしまったカナは、頬を膨らませて黙ってしまった。

「…ふう。…だからさ、なんかなるよ。全部は無理でも、一緒に協力し合えば何かが出来る。これが本当にそんな力を持って、本当に世を乱すような物だとしたら、僕が必ずこれを壊す」

時の証を握り締め、そう決意を新たにするシオン。

トラヴァスは、シオンの目に込められた決意に、これまでのように反論も出来ずにただ呆然とするしかなかった。

「…そう、ですか。なら、俺は引くしかありませんね」

「そうよそうよ！ あんたなんか早くどっか行っちゃいなさい！」

これ幸いばかりに、今まで黙っていたカナが急に声をあげる。

手をあげてぶんぶんと振り、舌を出して追い返そうとする様は、何というか 子供だった。

そんな仲間の思わぬ態度に、シオンは改めて呆れ返るしかなかった。

## 新たな決意（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## 合流へ

「では、シオン様。俺はこのまま帝国に戻ろうと思います」

「いいの？ 確か、ブレイクも親衛隊も来ているんだろ？ 彼らの元に戻って、それからじゃ…」

「いえ、いいんです。元々俺はあいつが嫌いだし、騎士団が親衛隊に混ざるのは後々面倒なもので…」

「そっか。君らしいね」

「では、これで」

「うん。戦場で会わない事を、祈ってるよ」

最後にその言葉を交わすと、トラヴァスは兵達を連れて南に、つまりフォーゲルノート帝国に向かって歩き出して行った。

「べーっだ！」

「カナ…。やめなよ、そんな事。みつともない」

去っていくトラヴァスに対し、カナは思いつきり敵意を表していた。舌を出し、これでもかと言うぐらいに身を乗り出して嫌いだと言う雰囲気を中心に押し出していた。

そんなカナの行動に、シオンは呆れながらカナをたしなめる。

すると、カナは頬を膨らませながらシオンに食ってかかった。

「何よシオン。私はあいつが嫌いなの。何したっていいじゃない」

「いやいやいや、そう言う問題じゃなくてさ。僕はみつともないって言ったんだ。もう子供じゃないんだからさ」

「むうう……。分かったわよ……」

シオンに諭される形で、カナはトラヴァスに向けた挑発紛いの行動を止め、シオンの隣に立つ。

そこからは二人共無言になり、焼け焦げた街を眺めていた。

だが、おもむろにカナがこう切り出した。

「……ねえ、シオン。なんか寒くない？」

体を微妙に震わせ、腕をさするカナ。

だが、シオンはカナとは違い、まったくその気温の変化に気づいていないようで平然としていた。

「ん？ 寒いだって？ 周りがこんなに荒れ果てて、しかもその原因が炎の魔力だったら寒くなるはずが……」

ヒュオオオオオ……

「うう……！」



突然、吹雪が起こったかのような冷気が、二人に降り掛かる。

元々、寒そうに自分の腕をさすっていたカナは、その冷気に当てられて小さくなってしまった。

シオンはというと、突如降り掛かってきた冷気に顔をしかめながらも、カナほど寒そうにはしていなかった。

それもそのはず。その理由は、シオンは少し大きめコートのようなものを羽織り、ズボンはスラッとしながらもぴっちりとしたズボンを着ている。

それに対しカナは、少々露出の大きい胸元の開いた服を着ており、下はあまり開かれていないが真っ直ぐなスカートだ。

これでは、両者の反応の違いが大きい事がよく分かってしまう。

シオンも寒いとは思っているのだろうが、如何せんカナが余計に寒がっているために、カナから見たら暖かそうな服装の自分

分が寒がっではいけないと思っっているのであろう。

「さ、寒い…。な、なんでよ…。…こんな、急に…」

体を一生懸命さすりながら、突然降り掛かってきた冷気に怨み言を漏らすカナ。

そんなカナを見兼ねたシオンが、手の平に炎の魔力を集中させなが

ら呪文を唱える。

「えーっと…。炎よ。我が魔力を糧とし我が前に灯れ。『灯火ノ焰』」

ヒート・フレイム

」

ボウツ…

シオンの差し出した手の平に、小さな炎が灯る。

自分の手の平の上でゆらゆらと揺れる灯火を見て、シオンは笑いながらその手をカナに差し出した。

「ほら。低級魔法だからそんなに熱くはないし、これなら暖まれると思うよ。あ、でも、一応曲がりなりにも攻撃魔法でし

かないから

」

「ちょ、頂戴！」

差し出された絶好の断熱機  
は喜び勇んで飛びつく。

カナにはそう見える

にカナ

そして、シオンが注意を促そうとしていた矢先に、それを無視してその小さな炎をむんずと掴んだ。

「無理に掴むと火傷する、よ…？」

「あつっーーーー！！ て、手が焦げるうーーーー！！！」

案の定、炎の魔法を握り潰したカナは、シオンの呆然とした台詞を

尻目にただ走り回っている。

手を振って一生懸命手を冷やそうとしたり、冷気が流れ込んできた方向に向けて手を突き出したりと、様々な方法で半分火

傷したような形の手を冷やしていた。

「…カナ…。自業自得だよ、これは…？」

「うー…。手がヒリヒリするよー」

泣きそうな声で手を前に突き出して叫ぶカナの姿は、かなり滑稽だった。

シオンはその姿を見て完全に呆れ返ってしまっていたが、カナが手を突き出す前から聞こえてきた微かな物音に、咄嗟に耳

を済ませる。

カナもその音に気づき、未だに手を突き出したままだが、目を細めていつでも動けるような体勢になっていた。

だが、その物音の先から現れたのは魔物でも帝国の追手でもなく、シオンたちが待つ仲間の一人だった。

「…あなた達、何をしているのかしら？」

戻ってきたユフィーには、正直な所二人の行動が理解出来なかった。自分に向かって突き出された手に、その後ろでそれを眺める少年。

はっきり言って、何かの芸かと疑ってしまう部分がある。

「ゆ、ユフィーちゃん…。…。お、おかえり」

「…。ただいま？」

手を突き出したまま、そして何かに怯えるようにカナが言葉を発する。

その言葉に、ユフィーはただ困惑してその言葉に対する言葉を返すしかなかった。

## 合流へ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2270v/>

---

アクレニア戦記

2011年9月10日12時36分発行